

歙砚的鉴别

和欣赏



胡中泰 著

ZHONG GUO MING YAN JIAN SHANG CONG SHU 中国名砚鉴赏丛书



湖北美术出版社

# 歙硯の鑑別と鑑賞

胡中泰 著

西本 太郎 訳

# 目録

一、序文.....	1
二、歙硯の概略.....	1
三、歙硯の三要素.....	2
(一) 龍尾石.....	2
1, 龍尾山から出た石.....	2
2, 龍尾石の三大要素.....	4
羅紋.....	5
眉紋.....	12
金星.....	18
金暈.....	23
魚子.....	27
稀少品.....	28
3, 龍尾石の優劣の鑑定.....	35
4, 龍尾石と他の石の見分け.....	39
(二) 実用.....	39
1, 研硯の効能.....	40
2, 発墨の性能.....	40
(三) 造型.....	41
1, 歙硯の造型の多様化.....	41
2, 歙硯の造型の図案紋様と彫刻法.....	49
3, 歙硯の発展工程で生まれたいくつかの変化.....	57
箕形硯.....	57
抄手硯.....	57
蟬形硯.....	64
四、歙硯の歴史と沿革.....	64
(一) 起源.....	64
(二) 興盛.....	67
(三) 衰退.....	69
(四) 復興.....	71
五、歙硯の手入れの豆知識.....	72

## 一 序文

### P1

歙硯は一冊の本であり、一つの謎であり、一種の美である。歙硯が世間に出て今までに1200年以上の歴史を持つ。千年近く歙硯は社会的発展に伴い発展し、歴史の中で人々の生活習慣が異なってきたとしても、その度に異なった賛美を与えられている。歙硯の造型、装飾にはその深く重い歴史が遺されている。歙硯が発展した歴史を紐解いてみても、屈折していない人類の文明が与えた社会的進歩、徽歙地区の文化的特性が与えた歙硯自身の文化が明らかに印されている。

歙硯は硯石が発見されその後、採掘され硯石の模様は珍しく多様であり神秘的な色彩を放ち、歙硯の産地もその名称も人々を惑わせる。

歙硯の肌はしっとりした玉のようであると賞賛され、一度手にすると手放せない程で、硯石に存在する天然の模様は艶かしく多様の表情を持ち、彫刻や造型によりさらに表情を多様化させ彫刻した者の才能や知恵が優美に表れる。

この本を理解して悩みから解かれ歙硯の美を觀賞してください。古今を通じて歙硯には一種の趣がある。私は歙硯の設計、彫刻の仕事を20年近く勤め、この20年の内に石を友とし硯は人生そのものとなった。月日が流れ石や硯に接するうちに、縁というものを理解していないという一種の特殊な感情が生まれた。今は幸いにも湖北美術出版社に招かれ「歙硯の識別と鑑賞」という参照の写真も豊富にあり、私の皮相な見方を話している書籍を出版させてもらった。しかしこれは専門家の考えを正すためのものではない。願わくは歙硯を眺める際認識するとき、趣味で収蔵している方もこの本を携帯しながら読んでほしい。また、歙硯の芸術性をいっそう輝かしいものとなるように願っている。

## 二 歙硯の概略

### P2

歙硯や端硯、洮河硯、澄泥硯は四大名硯と賞賛されている。

歙硯の正式名称は歙州硯である。歙州硯は、人によっては婺源硯とも呼ばれ婺源硯は産地の婺源龍尾山の龍尾硯をさす。

龍尾硯、婺源硯、歙州硯は歴史の中でそれぞれ違った名称で呼ばれていたが、みなそれぞれ同じ硯をいっている。龍尾硯は石の産地の龍尾山から名を取り、南唐時代から優秀な硯であると伝えられている。宋時代の李之彦は《硯譜》の中で“李皇帝は筆を使いものを書くときには澄心堂の紙、李廷挂の墨、そして龍尾硯を用いこの三品は天下一品の品々だ”と記している。歙州硯は産地の県や州からきている。婺源硯は安徽、浙江、江西の三省の国境に位置し歴史上、安徽歙州（その後徽省と改名）に所属する地区のものである。当時、歙州の管轄地は歙県、休寧、績溪、黟県、祁門、婺源の六つの県である。これらの

州や地名の名をモノに付けることは長い歴史の中で、習慣みたいなものになっている。例えば湖筆は善璉という地で作られた。そして善璉は湖州に属しているがゆえに湖筆と呼ばれるようになった。したがって龍尾硯も歙硯も同じことである。

宋代は龍尾石の開拓と龍尾硯の製造が歴史の中でもっとも栄えた時期である。この時期、歙州の管轄区の歙県、祁門に隣接する浙江で文化が開け江西の景德鎮の浮梁などの地域も相次いで石の採掘や硯の製造をおこなった。ここの硯も龍尾硯も州の名を取り歙硯として市場に流れていた。この現象はある一方では、その当時歙硯の名声は高く歙硯を求め、購入したい者が多かったことを説明しているが、もう一方では各地方で生産、製造し歙硯ではないのに歙硯に紛れ込ませ市場に流す人が現れたという問題がある。これから引き起こることは、人々が各産地の硯石を評論し歙硯の確認を始めた。曹継善は《辨歙石説》に“歙県で出た刷絲硯はとても良質で模様もはっきりしていると記している。祁門県の細羅紋石は粘板石のようで模様はすこし鈍くとても硬く色合いも少し淡い。墨をすると墨がすぐに乾いてしまう。”この石は模倣されると区別がつきにくらしく多くの人が婺源の粘板石と言っても確かめる必要がある。また宋代の唐積は《歙州硯譜》で文化が開けた時に採掘された石と浮梁石を述べ。“婺源县北西 60 キロに位置し三つの洞窟が連なった場所から洞灵岩の石が取れる。しかし簡単に採掘できるものではなくしかも、玉のように美しいものは少なく欠点や傷があるものが多い。すばらしいものは端硯に匹敵し石もしっとりしている。”洞灵岩紫石は大小問わず肝のような大きさで、今は浮梁県の山頂で採掘される。匠達がそこに住み込み採掘作業を行い茶碗なども生産しているが、凍るような冬に作業することは無謀なことである。

宋代の《歙州硯譜》には“浮梁の洞灵岩では硯は作りにくく、作れるのは茶碗のような石彫刻品だ”と記している。掘り出された石は玳瑁石と称されその用途は治平の時に変化した。唐のとき《歙州硯譜》では“浙石は衢州の採掘区に属し俗に言う玳瑁石であり。その模様はまさに鼈甲のようで石碑、絹織物のもと、建築用品にも使われ、用途は多様である。”また宋人の李之彦は《硯譜》で“歙石は龍尾溪で掘り出され金よりも貴重である”と強調し米芾は《硯史》では常に歙硯婺源石を讃えている。

歙硯は州の名からきているが、歙州で生まれた硯がすべて歙硯を指すわけではない。今、出版されている書籍の中には歙州で出たものはすべて歙硯であると解釈しているものもあるが、このような解釈は道理に通ってないように思える。なぜなら婺源は歴史上安徽歙州に属し、龍尾硯の天然のものは歙州から出た硯なのだ。しかし歙州で出たすべての硯を龍尾硯だけとはしていない。また歙硯の産地の範囲は昔の歙州がまとまったことにより拡大した。むかしの歙州管轄区内でされた硯だけを歙硯と呼ぶことができるだろう。

歙硯のこの解釈では州の名からきたものだが龍尾硯の名もこの異なった概念がある。明らかに歙硯の本義とは異なるが中国四大名硯の一つ歙硯はけっして歙州で生まれたすべての硯を指すものではなく、婺源で産出された龍尾硯を指す。

もちろん、物事は常に発展する。歙硯もまたしかりである。古人は硯の制作のため多く

の試みをした。現在の者も探求に励んでいる。私たちも誠意ある希望を持ち歙硯の名誉を失わないようにしなければいけない。さらに多くさらに良質な硯が出ることを祈り歙硯の発展が促進することを願う。歙硯のように歙県から出た硯に県名を付けたとの同様、その土地に関係しているから名を付けることは安易なことである。歴史上の事実は歙県から出た歙硯という事だけでそして、歙硯の採掘、製造は歴史的に途切れ途切れになっている。歙硯の採掘、製造が停止している時代にはその土地のことを知る者は少なく歙硯の話をしては歙県に思いをはせた。清代の徐毅還は、わざわざ考証調査に踏み込み《歙硯輯考》にはこんな一文がある。井戸の中に沈んでいた石がまさに歙硯であると、だがこれには疑問が残る。さらに甲寅（公元 1734 年）に命を受けた護衛兵が井戸の中を調べたが何も出てこなかった。唐代の《硯譜》で蘇黄（蘇軾、黄庭堅）の文章には、“硯は婺源の龍尾山から出たものだ”と繰り返し書かれ昔の歙州に埋もれ婺に属する歙からでた出た硯は龍尾硯といわず歙硯とした方がいい。私は歙県からでは硯をすべて歙硯とは呼ばず、歙硯はおそらく婺源龍尾山から出た硯を歙硯と呼ぶものだと思う。

### 三 歙硯の三要素

#### P2

材質、実用、造型は硯の三大要素である。材質は硯のクオリティー、実用は硯のメイン、造型は硯のスタイルである。硯にはこの三つが不可欠である。材質、実用性、造型には硯の作用を表し、材質は実用の優劣を決め、確かな硯にはそれ相応の名称が付けられる。実用性は、材質と造型を頼りに体現し、硯の存在意義を決める。象徴的だが確かなものだ。造型は人の手によって実用性を体現している。美しい形式を持つものにもそれにちなんだ名前が付けられる名前が付けられ、これは具体的に表現されている。材質と造型は表現方法が多様である。したがって材質と造型が違えば様々な形式の硯が姿を現すのだ。

わが国の硯の歴史は長く伝統もとても長い。硯の材質も造型も豊富にあり、硯といっても材質が違えば、石硯、陶硯、瓦硯、漆硯、木硯、銅硯、銀硯、玉硯などがある。造型も様々で模造形、自然形、長方硯、円形硯、方形硯、八角硯、亀形硯、荷葉硯（はすの葉）、琴硯、松鶴硯、海天旭日硯、天池硯、子石硯などがある。唐代に硯石の採取、朝代には硯の製造が専門化し、硯の大きな躍進の時代であった。宋代になると各地で豊富な種類の石材が採掘され、それぞれの石材にそれぞれの特徴を生みそれぞれに名前がつけられた。名前は産地、山、模様、形状からとって付けられた。例えば、龍尾石は山の名、端溪石は溪、洮河石は河、紅絲石は模様と色からきている。硯の名称で龍尾硯、端溪硯、洮河硯、紅絲硯などその石の名前がそのまま硯に付けられたものもある。それぞれの硯石の材質には特徴があり硯石やその効果によって硯が形成される。龍尾石、実用性、造型は歙硯の三大要素である。

## (一) 龍尾石

歙硯の硯石産地は婺源の龍尾山であることから龍尾石と呼ばれている。硯石の名で龍尾石以外は、県名、州名からきた名称だ。例えば、婺源石、歙石だ。そしてこれらの名は掘り出したときに掘り出した者が付けたと言われているが、事実是不明である。宋代の李之彦は《硯譜》で“歙石は、龍尾溪から出たものだ”といている。

### 1、龍尾山から出た石

龍尾山、また羅紋山とも呼ぶが宋人の曹継善は《歙硯説》の中で、“龍尾山、また羅紋山の芙蓉溪のふもとに石坑が最も多く 50 キロ近く延びていて、途絶えることを知らない”といている。

龍尾山は標高 200 メートル周囲 15 キロ、婺源県溪頭内にあり浙源と大畷鎮に隣接する。村などもあり、溪頭、硯山、外庄、嶺背、龍尾、駟坑、濟溪、大畷などだ。すでに採掘されている硯坑の主な地域は硯山村の周辺であり、歴史上では内山羅紋、外山羅紋と呼ばれている。これは硯山の境目を言っていて、硯山村の中を「内山」、外を「外山」としている。硯山村は龍尾山の中心にあり、緑濃い山々に囲まれ、芙蓉溪が村を突き抜けて流れている。硯山の入り口は溪頭村から流れる川が合流し武溪という溪になっている所にある。眺めて見ると、細い川ではあるが高大で、山は雄雄しく、水は透き通っている。とても風流な景色である。

歙硯を愛している人は、いつの日か龍尾山を訪れることを夢見ているはずだ。龍尾山に行くとなると交通が少し不便で、旅行気分で行くほど容易い事ではない。宋代の偉大なる書道家の黄庭堅はかつて龍尾山を歩いたらしい。彼は《硯山行》でその時のことを“とても困難な道のりだったが、とても考え深いものだった。車も通れない、舟で漕いで行くこともできない。自分の足でのみたどり着ける龍尾山。龍尾山の山々は空の半分を奪い、木にはつたが絡み、崖壁は天を支えているようである。”と記している。

現在、龍尾山に行くのも少し便利になった。硯山村までの道路も通ったので、歩かずに直接車でたどり着ける。行き方は三通りある。1、まず列車、飛行機で黄山市まで行き、バスで婺源県まで、そしてそこでバスに乗り換え硯山の入り口溪頭で降りる。硯山には中学校が一枚あり中学校に向かいながら 300~400 メートルで着くだろう。黄山市から婺源県、婺源県から溪頭は毎日 2, 3 便バスが運行している。2、飛行機か列車で景德鎮市まで行き、バスに乗り換え婺源県に景德鎮から婺源行きのバスは沢山あり、約 84 キロ程だ。婺源県に着けば溪頭までバスですぐにたどり着ける。3、飛行機か列車で衢州市へバスに乗り換え婺源県へさらに乗り換え溪頭へ。衢州から婺源は毎日何便かのバスが出ている。上海や杭州などからも直接バスで婺源に行く人もいる。

龍尾山に行くことは昔のように難しいことではなくなり、昔のように遠い存在ではなくなった。

## 2、龍尾石の三大要素

### P4

龍尾石の三大特徴は、硯石の石質、紋、色に表れている。質は硯石の内にあるもので質量である。紋は硯石の天然の模様である。色は硯石の持つ固有色である。

一、まず質を説明したい。龍尾石は硬く模様も細かく、石肌はしっとりしていて発墨も冴える。質が程よく堅く豊潤なものは美しい限りである。宋代の文豪、蘇東坡は深く感銘し「孔毅夫龍尾硯銘」の中で、“龍尾石にある鋒鋦はとても細かく、発墨がいい。また、筆もいためることもない。そして、堅くありながらも、なめらかで美しい。手触りは瓜のようにすべすべして優しく、模様も絹の様に柔らかく細かい。金よりも名声高く、玉のように豊潤である”と言っている。宋代の「四大家」の一人で「和氏璧」の蔡襄は龍尾石の価値を「徐虞部以龍尾石邀余品第」で“玉のように精巧で鋒鋦での発墨も音も滑らかに聞こえる。”と言い。黄庭堅は「硯山行」で龍尾石や類似した石に対し、“重く石肌が豊潤なものは貴重である。”と言っている。

龍尾石の内にある美は、眼と手に直に伝わってくる。眼で見ると硯は宝玉のようで透明感がある。硯を鑑賞する際に人々は手で硯を撫で手触りが「良い」、「悪い」と言う。良い手触りというのは石の肌がまるで幼児の様な肌触りでデリケートな感じを受ける。古人はこのような手触りを「子供の肌」、「美人の肌」と比喻している。優れている硯はこのような手触りをしていて、歙硯をよく理解している人はこのような美を感じている。あまり歙硯を理解していない人は早くこの美に気づき、この手触りを味わえるチャンスにめぐり合ってほしい。多くの硯を触りたくさんのチャンスを掴むことが歙硯の美を認識することに繋がる。

龍尾石は地質学的には変質岩となる。この変質岩は、火山岩が高温作用で構成されたもので、もともとの石質が変化してできた新しい種の岩なのである。そしてこの龍尾岩が地面に埋もっていた期間は10億年くらいだ。

龍尾山の採掘硯坑は私たちも見学ができた。坑の深層部に行き、そこで作業をする。周囲には硯にはできない硬い石が転がっている。古くから麻石三尺と言われ、採掘された岩の中で硯にできるものはこぐわずかだ。地殻内で高温作用が起こり、原石の構成が変化する。この現象はある一部に出現したり、一塊になって出現したり、帯状に出現したりする。このような変質した岩の層は一枚板の岩が層になっていて、その鉱物成分には蠕緑泥石、白雲母、石英、金属鉱物、微量炭質などである。龍尾石の硬度を測ると平均して4度くらいだ。現在の科学分析でわかった龍尾石の成分、特徴は神秘的な龍尾石の一部を明らかにしただけだ。採石する者が採石をする時、硯を作る匠が硯材を吟味している時、昔から彼らは石の成分などは念頭になかっただろう。そして優れた硯石を科学分析しながら採掘するなど不可能であるし、硯を買い求める時に科学分析をしてから買うことなども不可能だ。自分に借金をする気持ちで、経験を積む。そしたら述べてきたような直感でよい硯がいやでもわかるようになってくるだろう。

二、次に紋だが、龍尾石には多数の天然の模様があり、形態も様々でどれも美しい特徴がある。古人は龍尾石の模様を十分に尊重し特性などによりそれぞれに名称を与えた。史料などやるものの現在存在す中で特に有名なのは、羅紋、眉紋、金星、金暈、魚子の五つである。

## 羅紋

### P5

模様は、細かくしなやかでとても優雅で、粗いものから細かいものまである。そして密接していて明暗の区別もある。模様の形成は、多くの特性を持ちその特性が代わり代わり出現する。羅紋は細かく分けると多種類ある。

- 1、粗羅紋 模様が交じりあっているのがはっきりわかり、石質の構成が多数あり粗い。模様の深い色の部分は硬く、浅い部分は柔らかい。細かい彫刻には向かないとされている。
- 2、細羅紋 模様は細かく緻密で、石質の純度が良い。模様の間が柔らかい部分硬い部分がないため、彫刻には向いている。硯のもっとも優れた機能でもある発墨も良好である。
- 3、暗細羅紋 模様は均等で目立つような模様ではないが発墨もよく、石質の硬さも柔らかさも均等して彫刻にも対応できる。
- 4、水波羅紋 模様が織り交ざっているが均等の配列で湖の水面に風が吹きつけ波がたっているかのようで、とても趣がある。水浪羅紋とも呼ばれ石質もよく彫刻もしやすい。
- 5、角浪羅紋 模様に抑揚があり江海の渦巻く波のようで凹凸があるように見えるが、玉のように滑らかだ。
- 6、刷絲羅紋 模様が精密で整って見える。ブラシで磨いた後のような細かい痕が流れるように表れている。その模様が長いものから短いものまであり、長いものは長刷絲といい短いものは短刷絲と言う。石質は緻密な構造で彫刻もしやすい。
- 7、牛毛羅紋 刷絲羅紋に比べ模様が短く水牛の毛のようである。この特徴によりこのような名前が付けられた短刷絲紋と類似している。
- 8、古犀羅紋 犀角羅紋とも呼ばれ、模様は細く緻密で犀の角の模様に似ている。彫刻もしやすく、発墨も良い。
- 9、泥漿羅紋 模様に柔軟性があり、粘土質のようである。石質が豊潤で発墨も彫刻も良い。
- 10、金星羅紋 一つの石に金星と羅紋が表れ、このような石を金星羅門と総称している。細く分類すると金星水波羅紋や金星刷絲羅紋などに分けることができる。
- 11、金花羅紋 羅紋の中に花のような黄金の点が大小まばらにある。まるで洒金宣紙にばらまかれている金粉のようだ。

- 12、 金暈羅紋 羅紋の仲に黄金色の暈が表れている。暈の形態は多様で雲や霧、山水が流れているかのように見えたりする。金暈羅紋と金星羅紋は同じようなものであり、この二つの特徴が合わさり細かく分けるとさらに種類が細分化される。金暈水浪紋や金暈細羅紋がそれにあたる。
- 13、 算子羅紋 算条羅紋とも呼ばれ、模様が細長いや筋の様に延び、算盤の根のようである。算子羅紋は粗いものと細かいものがあり、粗算子や細算子と呼ばれている。
- 14、 烏釘羅紋 石に細かく小さい黒点が均等に表れるが少しわかりにくい。石質はき細かく艶がある。発墨もよく彫刻もしやすい。眉子と間違えてしまうこともある。
- 15、 鰍背羅紋 模様と色、暈が鰍の背中のように点が均等に表れ、多くの人が魚子紋と呼んでいる。
- 16、 松皮羅紋 松紋羅紋とも呼ばれ、模様が粗く一般的に松の皮のようである。見た目は高低差があり、平らなようには見えないが手で触ると平らで滑らかである。  
羅紋の種類は多く、今並べて述べた以外にもまだ沢山ある。石心羅紋、倒地羅紋、卵石羅紋などがある。

## 眉紋

### P12

眉子とも呼ぶ。黒い線がはっきりしている。人の眉毛に見えることからこの名前が付けられた。眉紋の色が青く見えるものもある。石質はきめ細かく豊潤で発墨も優雅である。歴代の文人雅士も深く崇拝している。眉紋には様々な種類があり、それぞれに味わいがある。この天然の模様を賞賛しない者はいないだろう。眉紋の一部を紹介する。

- 1、 闊眉紋 粗眉紋とも呼ばれ、眉紋が広々としていて長いものから短いものまでである。蚕が横になっているように見える。
- 2、 細眉紋 眉紋の線は細く長い線や短い線がある。柳の葉に見えたり美人の細く美しい眉の様にも見えたり、とても妖艶である。
- 3、 長眉紋 眉紋が長く美しく垢抜けていて、模様の線が硯石の端まで延びている。自然が描いたすばらしい創造画である。
- 4、 短眉紋 眉紋が短く小さい。表現が豊富で眉紋が交差して出てくるものもある。整って表れたものは波のように見え、思いをはせるものがある。
- 5、 対眉紋 眉紋が平行に二つあり、人の眉毛のように並んでいる。とても奇妙である。
- 6、 緑豆羅紋 眉紋が豆のように表れ、ほんの少しだけだが緑色をしている。めったに見ることができない貴重品である。
- 7、 鱗肚羅紋 羅紋が均等に表れていて紫色に近い黒色をしている。硯石の色が黄色に近く、黄色の中に黒い点が所々にありウナギの腹部の色に似ている。石色が青黒いものは、どじょうの背のようで鰍背眉紋や魚子眉紋と呼ばれている。
- 8、 雁湖眉紋 全体的に深く広い池のようで四方に眉紋が交わって見え、雁が集まりいっ

せいに飛び立っているかのようにも見える。とても貴重な品である。

- 9、 海浪眉紋 眉紋が交差して、海が荒れ浪が立っているかのようにとても躍動的である。
- 10、 金星眉紋 眉紋と金星が存在し金星羅紋と同じように見える。この種は沢山の種類に分けることができる。金星長眉紋や金星短眉紋などもある。
- 11、 金暈眉紋 眉紋の中に金暈があるもので、金星眉紋と同じ様に細分化すると多く種類があり、金暈長眉や金暈短眉などである。また錦蹙眉紋とも呼ばれこれを曹継善は《辨歛石説》で“石の模様は眉の様で、眉間には金暈が輝いている”と説明している。
- 12、 簇眉紋 羅紋が群がり集まっているようで、一つの群れの中に大小の眉紋がある。群れと群れの間は一定の距離がある。
- 13、 虎斑眉紋 沢山の浪がたっている模様が虎柄のように表れている。
- 14、 白眉子 眉紋の色が白い。
- 15、 金眉子 眉紋の色が金色である。
- 16、 棗心眉紋 眉紋は短く小さい。模様の両端が尖っていて、ナツメの種のような。眉紋の種類は多く、今述べた以外にも貴重なものがある。例えば重眉紋のように大小二本の眉紋が一緒にあり、緻密に配列しているものや、線眉紋のような細い線が短いもの長いものが表れているものなどがある。

## 金星

### P18

色は黄金で点状に表れ、青黒い硯石に表れるとまるで天空にさんざんと輝く星たちのようである。金星には大きいものから小さいものまであり、集中しているものや散らばって表れたりする。その形態も様々である。

- 1、 雨点金星 金星の形はやや細長い。まるで雨がばらばらと降っているかのようなようである。
- 2、 鳳眼金星 金星が円形でその円の中に眼のような点がある。
- 3、 葵花金星 金星が回りを囲み輪のように集まっている。内側には星はなく、向日葵のように見える。
- 4、 金圈 形が輪のようで大小あり、常に金星と交互にある。
- 5、 金花 不規則的に黄金の点があり、花のようである。決まった形式はなく、金星や金暈と一緒に出現する。金星金花や金暈金花などと呼ばれる。
- 6、 粟米金星 星点が小さく、とうもろこしの粒のようである。
- 7、 谷粒金星 星点がアワの粒のようである。
- 8、 魚子金星 魚子紋の金星が表れている。
- 9、 水浪金星 水浪紋に金星が表れている。
- 10、 眉紋金星 眉紋に金星が表れている。
- 11、 金暈金星 金暈と金星と一緒に存在する。

- 12、緑豆金星 星点が豆のようで立体感があり、星が明瞭に表れている。
- 13、雨絲金星 急に降ってきた雨粒のような金星が表れている。
- 14、金錢 金色の線が一本の模様になっている。粗いものから細いもの、曲がったものから直線のもの、長いもの短いものまでである。

金星も他の種類と同じである。細かく分けると、玉帯金星、銀星金星、刷絲金星などがある。

## 金暈

### P23

金暈は黄金色をしていて、かたまつて表れる。金暈と金星は同じ硫化鉄の物質であり、硯石に自然に浸透された形で表れる。暈はもともと、日光または月光が雲や霧の水分で反射、屈折して起こる、太陽と月の周囲に見える光の輪のことである。

金暈の形状をみると、多様あり、古人は硯石に表現された様々な金暈に趣のある名称をつけた。例えば、「長寿仙人」「鶴舞」「双鴛鴦」「枯槎仙人」「金雲気」「湖中寒雁」などがある。このような名前は金暈に表れた具体的な形象からきている。もちろん天然模様なので世界に二つとない。もし同じような形があり似たような名前が付けられても、何個もないだろう。そして具体的な形にそれぞれ名前を付ける事はとてもむずかしい。主な形象として二つに分けられる。

- 1、山水金暈 暈の形が雲、山、川、河流のような形をしている。
- 2、物状金暈 暈の形態が人物、動物や植物などに見える。

## 魚子

### P27

硯石に小さい黒点があり、均等に密着していて魚のたまごのようにみえる。卵は子とも言うので魚子と付けられたのだろう。もしも私の家が婺源にあったとしたら鶏の卵から名をとり「鶏子」と付けていた。魚子の石色は様々で主なものは以下のものだ。

- 1、鰍背紋 青に近い灰色で硯石に黒点がある。鰍の背のような模様である。
- 2、茶葉末 青緑色の硯石に黒点が代わり代わりある。この模様と色がお茶の葉のようである。茶末緑とも呼ばれる。
- 3、鱧魚黃 鱧肚とも呼ばれ、黄色に近い色の硯石には小さい黒点がある。鱧魚の腹の皮膚のようである。
- 4、碎氷紋 石には不規則的に細い白線が交差している。まるで氷にひびがはいったかのようだ。この白線紋は白石英ではなく、硬度も他のものと同じだ。青く灰色に近い色をしていて青緑の魚子が石の中にあるものは滅多に出現しない。
- 5、石眼 石核とも呼ばれる。多くは楕円形で色が深く濃い色をしていて、質的には硬い。円の周りが淡い黄色か淡い青色である。ある石眼には石眼の中に美しい点があるものも

あり、この点と外側の色は同じような色をしている。もともと石眼の部分は少し硬く、実用に関していえば少し邪魔者ではあるが鑑賞するにはとても華やかである。すべての石眼は大変きれいではあるが、実用性を求めてはいけない。

魚子石は金星や金量があるものもある。魚子金星は前に説明したとおりで、魚子金量に関しては魚子紋に金量が表れているものだ。魚子紋の暈自体は黄色のような色をしていて、大多数が土色に近い黄色で艶がない。そして暈が硯石の表面に出ているが磨くとなくなってしまう。彫刻するさいには、金量を残し活かしながら彫刻をする。

## 稀少品

### P28

稀というのは龍尾石には滅多に出ない石のことである。

- 1、銀暈 その名の通り銀色の暈であり、他の模様と同時に存在する。金暈銀暈、銀星銀暈、羅紋銀暈がその類である。
- 2、銀星 星が銀色で形態は金星と同じである。
- 3、玉帯 石質が玉のように滑らかで、少し緑かかっている。黒い直線が分割して延びて長さも幅も様々で、この線が緑のものは玉帯と呼んでいる。玉帯石には金星が多く表れて、金暈も表れる。これを玉帯金星、玉帯金暈と呼ぶ。その他にも白色の玉帯がある。
- 4、龍鱗 石の模様が龍の片鱗のようで光が屈折して見える。見た分には凹凸があり、平らではなさそうだが豊潤で滑らかである。模様の形跡は角波、水浪紋に似ていて羅紋の仲間であろう。しかし他に比べて明らかに美しく、取れる数も少ない貴重品となっている。
- 5、廟前紅 “廟前”は産地の名であり硯山の入り口は神の廟に近い場所と言われている。石の色は黒に暗紅が混ざったようで、古くから廟前紅と呼ばれている。廟前紅の石質は硬く豊潤である。清代以前から使われ清代の学者の程瑤田は《紀硯》に“廟前紅石の色は少し紅色で端石に似ている。”と記し、80年代後半にも採掘された。これ以前は大勢の人は名だけを知っているが、どのようなものかは知らなかった。現代の歙硯の専門家で故人の李明回さんは《歙硯》で“今どの博物館の所蔵品の中にも歙婺の坑の中にも紅色の歙硯は見たことがない。近年の産地にもなかった。世間に広く伝わったのなら持っている人がいるはずだが、それもわからない。はたして紅色の歙硯はあるのだろうか”と記している。

1991年、龍尾山にて廟前紅石の搜索、採掘は終わった。掘り出された石の中に二つほど廟前紅が見つかった。一つは石色が端石に似たもので細羅紋があり、石層の間に白色の細い線があった。亀の甲羅の模様のようなだったので亀甲紋といえよう。このような石層の厚みは一般に2~8ミリだが、この石は何層かありすべての層の間隔が10~20ミリある。亀甲紋の白紋線は見たところによると白石英（とても硬く硯では石の病だ）で下手に彫刻すると硯の価値を下げってしまう程だが、実用的には問題はない。亀甲紋は白色線紋以外に、灰色線、金色線があり。それぞれ白亀甲、金亀甲や灰亀甲

と分けられる。その中でも金亀甲はとても美しい。金亀甲を見ていると磁器の破片の模様、唐の僧が着ている袈裟の模様または漁師の使う魚網の模様に似ている。古人はそれらを哥窯紋、袈裟紋、魚網紋と名づけた。もう一つの廟前紅は紫色の砂に紅色の泥を混ぜたような色で、羅紋はなく少数の暗く淡い刷絲紋がある。紅というよりも青い色に近い石だった。青色のものを廟前青という。

- 6、廟前青 美しい青色をして豊潤である。模様はなく廟前紅と同じ所から採掘される。廟前青と廟前紅は歴史においても、あまり見る事ができないので解析もされていない。石の美しさはわかるが、どこにどのようにして生まれるかは、はっきりしていない。曹継善は《歙硯説》で翰林叶卿が 4~5 寸の淡い青色の硯を見た時のことを記している。“それは秋雨が晴れた様な青で、眺めていると日が暮れてしまう。表面は玉のように滑らかで模様はまったくない。歙硯ではあるが、どの坑から出たのかもしれない。もう二度と出会えないかもしれない、まったくもって美しい硯である。と記し、曹継善自身は廟前青を見たこともないし、どこが産地なのかもわからないと言っている。清人の汪微遠は《龍尾石辨》で廟前青の事を“丰端吳太史の硯はただの歙硯とは思えないほど美しく秋雨が通り過ぎた空のような色で、豊潤な玉のようだ。それは米元章からの宝だと伝えられていて閔君寶が溺愛して毎日のように撫でる気もわかるくらいの珍重の品だった。龍尾のものだろうが、淡い青色の肌には金星も刷絲羅紋もなかった”と述べている。汪氏は廟前青石を見た事があり、龍尾石の中でも廟前青は精彩されたものだと賞賛している。しかし産地や坑の名前については語っていない。こんなすばらしい硯石が龍尾山のどこからでるのか、解放後龍尾山では長い間採掘調査が行われていたが、一度も姿を現すことはなかった。これは歙硯の愛好家などが解明したい謎であった。

1991 年龍尾山で廟前紅が掘り出された同時期、廟前青も見つけられた。この実地を考察し、実物論証もしたおかげで廟前青が龍尾山のどこにあったのか具体的な位置がわかった。廟前青と廟前紅は同じ所から出ていて、この二つは一つの石に依存共存している事がわかった。

同時期、廟前青、廟前紅、彩帯、玉帯がすべて同じ硯坑から発現した。具体的な硯石岩の層を見ると、ある層は青く、ある層は紅色であった。各層の厚みはばらばらで厚かったり薄かったりであった。採石する際に層を順に平らに取っていけば、ある一面は青、ある一面は紅のものとなったであろう。また塊として青を表現していたり塊として紅が表れている硯石が出たかもしれない。斜めに採掘すれば一つの石に少しずつ青と紅が表れていただろう。または、青と紅の線が重複しながら列をなし帯状の模様になっていたかもしれない。このような色のついた帯状の模様を「帯紋」や「彩帯」と呼ばれている。岩の層が深くなるにつれて青色が徐々に緑色に変わり、紅色は黒色に変化する。硯石の中にも金星、金暈、銀星などが一緒に出現する。斜めに採掘されたものは玉帯紋が産出された。

玉帯、彩帯の形は岩の層を斜めに採掘した石以外、石中には異なった色彩の石層が平

らに整って存在し厚みがある。またある石の中には色彩の石層が平らなものではなく厚みもない。また斜めに向かい採掘した石は色や帯紋がはっきりしていないし石色が異なったものもあり、灰色と白色の混ざった色のものが出たりした。それらには帯紋はないがどこか人々に美を感じさせ、奇異的な印象を与える。

龍尾石の模様を語る時、忘れられない硯石がある。それは何も模様がないが黒く重量感があり、質は硬く肌は豊潤で滑らかだ。龍尾石の失ってはいけない上質な硯だ。

三、色について。採掘されて出た硯石をみると、龍尾石の色彩は青い灰色をしているが、硯の制作過程中に研磨をすると石色は黒に変わり、青黒くなる。青黒色は龍尾石の代表的な色で人々は“黒龍尾”と呼んでいる。現代の国画大師である刘海粟は“鸞刀夜割 黒龍尾 碾作端溪蒼玉子。 花彫鉄面一尺方、 紫霞紅光墨花飛”という詩を詠った。詩の中の“鉄面”とは龍尾石の色を形容している。

龍尾石は青黒い色が主とされているが、必ずしも同じ色ではない。龍尾石の色はまとめると五種類ある。一つは青黒色だが、この色は龍尾石の多数を占める。二つ目は紅色。廟前紅がこれに属する。三つ目は青色で廟前青がその一種である。四つ目は黄色で膳魚黄がこの類だ。最後に緑色。茶末緑がこれに属する。このことから色彩は平均的に下色のことを指すが、硯の優劣を決めるものではなく、ただ歙硯だと区別することにすぎない。主要な判断基準は質、紋（模様）、色である。

### 3、龍尾石の優劣の鑑定

#### P35

龍尾山ではすでに採掘されている硯坑が多くある。そして、それぞれの坑から出た硯石には優劣を付ける事ができる。硯石の優劣を付ける基準は硯石の質、紋、色の三つで分析し判断する。質は硯石の内にある質量、紋と色は硯石の表面的な特性である。質の優劣は紋と色の優劣を決め、そして紋と色の優劣は質によって決まる。しかし、硯石の模様の有無で優劣は決められないし、美しさだけでも決められない。主要なのは、硯石の質がよければその硯は優れているものになる。また、ある硯石には模様がないが石質が玉のように緻密で滑らかなものなら、この硯石も賞賛の声を失う事はない。また、ある硯石の模様がとても美しいが質がとても粗悪なものはどうだろうか。硯石での質、紋、色との関係は、織物の布の質、図案、色彩の関係と同じである。もし同じ図案、同じ色で染めても布の質が変わればそのもの全体の優劣も変わってくると思うのだ。質の良し悪しは図案や色彩では区別できるものではないのだ。硯石も同じように紋、色では区別できるものではないし、論ずる事もできない。硯石の優劣を認識するには、まず質だ。紋や色はその次で良い。

しかし、硯では紋や色は眩く存在している。人々が硯や硯石を選ぶ時まず紋や色から見る。しかし龍尾石の模様は多い。これにより硯の模様で優劣を決めるという現象が起こった。例えば「羅紋、眉紋、金星、金暈、魚子の中でどれが優れているのか劣っているのか」「歙硯では眉紋が一番か、金星が一番よいのか」このような話を持ち出す。しかし模様同

士を比べても回答できないのだ。なぜなら金星と眉紋に関わらず、硯坑から産出されているものは多く、すべて止まることなく生まれているのだ。もしくは多くの場所で産出されて、同じ模様だが異なった硯坑で出たのなら、模様は同じでも石質は違って来る。石質が違えば優劣が生まれてくるだろう。同じ硯坑から出た同じ模様の硯石でも具体的な位置は違う。それは表層からなのか、深い地層からなのか、これも地質の優劣を判断できる要素である。しかし問題はそれぞれの模様の何が優れていて何が劣っているのかだ、これを説明したいと思う。だが、前提として硯石の地質はすべて良質なものとし評論していきたい。

羅紋、眉紋、金星、金暈、魚子が代表とされる五つである。まずこれを二つの階級に分ける。一つは羅紋、眉紋、金星、金暈。二つ目は魚子である。眉紋と金星の両者は紋や色の特性も違えば体現している美もそれぞれ違った形である。眉紋は雅やかであり、金星は目が覚めるくらい美しい。この二つの美は人々を魅了し続けている。歴史上でも“眉紋は比べるものがないくらい美しい”“金星は高貴なものだ”といった観点がある。これは二つの異なった美の形が、異なった視点、観点、また美的センスで語られているため、眉紋と金星を比べてもどちらが優れているのか比べることは困難なことで、それぞれの特性を愛し、各個人が自分の意見を述べているだけなのだ。

人々は硯石の模様で硯石の優劣を識別してしまうが、実質には硯の優劣は地質の差であり主要なのはどの硯坑で出たかで差が明らかになる。龍尾山の各硯坑から出た硯石を見ると同じ模様の硯石が異なった硯坑からも出ているが、硯石の地質は明らかに差がある。これは優劣を語る上で硯石の地質が離すことのできない要素であり、硯坑も必要な要素の一つであると言う事だ。次に各坑の具体的な状況の紹介をする。

### 羅紋が出る五硯坑

- 1、羅紋里山坑 ここは硯山村の外庄村の真向かいにある山上に位置する。南唐時代から採掘が始まり宋代で停められている。洞口は草木が生え、洞口内は奥深くどんよりしている。この坑から出た石は細羅紋が多く、金星、金暈もごくわずかに出る。
- 2、羅紋坑 眉子坑の東側（昔は寨頭や虎寨頭と呼ばれている）にある。南唐時代に開発され、北宋、明代、当代に相次ぎ採掘された。この坑からは粗羅紋、細羅紋、水波羅紋、刷絲紋などがでた。しかし出た石筋が多く約 18cm～22cm の筋がないものになる硯石は上等のものだ。古人はこのことを“七寸のものは珍しく八寸のものは宝だ”といっている。
- 3、水舷坑 眉子坑の下、芙蓉溪の側に位置し、南唐時代に開発され宋代に歙州を守備する銭仙芝が採掘場所を溪に変えた。坑が深いため谷が 5～6 メートルあり、毎年のように水害に遭い採掘は困難であった。現在では水が涸れる秋に採掘をしている。坑の中には二台の潜水ポンプが設置されていて日夜、坑の外に水を排出している。こうしないと坑で採掘ができないのだ。1979年と1986年に労働者や物資を集中して送り込み採掘に重点を置いた。出てきた硯石は金星、金暈、水波羅紋、細羅紋などだ。その

後、過度の採掘によりあまり良い石が出なくなった。このため採掘が止められ、坑は廃止され埋もれていった。

- 4、水蕨坑 溪を挟み水舩坑の真向かいにあり、距離にして 20 メートルくらい離れた所に位置する宋景祐年に開発されその後廃止されはしたが 1988 年に再採掘された。出てきた硯石は粗羅紋、細羅紋、眉紋、金星、金暈などで、その中でも眉紋は比較的多く産出された。しかし硯石岩の層は多種多様で白石英層が交じっている層があった。石英がないほうが硯には良いのだ。
- 5、碧里坑 濟山の上、濟溪村の対岸にある。宋代に開発されその後、止められた。1988 年に村の人々が偶然古い坑に残された硯石を発見し、そのころからまた採掘が開始された。出てくる硯石は金星、金暈、羅門も出た。紋の色は美しいが多数の石質はあまり良くないものだった。少数ではあるが、石しつが硬いものがあり、これは優れた硯材だ。

### 眉紋が出る四硯坑

- 1、眉子坑 羅門山にあり芙蓉溪から硯坑まで 30 メートルくらいの所にある。唐代に採掘が始まり宋代まで続けられた。元代後は採掘が見かけなくなり、1984 年にまた採掘が始まりこの年に産出された硯石は多かったが、良い石が出なくなったためこの一年で止められた。この坑は上、下また中腹の下、中、上の三ヶ所ある。下坑から出るものは粗眉紋、細眉紋などで、紋や色がはっきりしていて石質も優れている。中坑は眉紋が比較的長い。眉紋が相互に交ざりあっているものが多い。石質は優れているが下坑に劣る。上坑の眉紋は細かく色も黒紫で光の屈折がない。眉紋の中に細かい線が多くあり、短いものは両端が尖っていてナツメのようで囊心眉紋と呼ばれている。魚子紋もあり、石色は青黒いものと鱗黄の二つがある。ここから鱗肚眉紋もでる。
- 2、水蕨坑 (羅紋が出る五硯坑 4)
- 3、叶九坑 嶺背村の向かいの山にある。宋代から採掘が始まり。自治平後に採掘が止められた。1986 年にまた採掘が始められた。ここの坑からは羅紋がよく産出され、波のような模様の石が多数を占めた。眉紋がある部分とない部分の硬度が均等でなかったため硯を制作する時彫刻に手間取った。この石質は眉子坑の石質より劣る。
- 4、外庄坑 外庄村の後方にある山の山頂にある。ふもとから硯坑まで約 70 メートルある。山の背には同じ高さの硯坑がもう一つあり、この二つの坑が山の前、後ろ両側に位置する。この二つを山の前にあるものを前外庄坑、後ろのものを後外庄坑と呼んでいる。二つの坑から出る硯石は大きい。眉紋、ごく少数金星、金暈があるが、石質は粗く軽い。眉紋と眉紋がないところの硬度の差が激しく彫刻には向かない。叶九坑には劣る。この二つの坑から出た硯石を簡単に“外庄眉”とも呼ばれている。

### 金星が出る主な六硯坑

- 1、金星坑 羅紋金星坑とも呼ばれ龍尾山の北西にあり、羅紋坑からは 150 メートルのところに位置する。宋代に採掘が始まり、その後停められている。硯坑は早い時期に崩れ荒れ果てた。しかし残った旧坑を見つけ採掘がまた始められた。この坑からは金星、金花、羅紋があり石質は良い。金星坑の周囲からは貴重な玉帯紋、彩帯紋と神秘的な廟前青、廟前紅などもでる。
- 2、水舷坑 (羅紋が出る五硯坑 3)
- 3、水蕨坑 (羅紋が出る五硯坑 4)
- 4、溪頭坑 龍尾山の北に位置し眉子坑から 1 キロ離れている。宋代から採掘が始まり、その後停止された。この坑は山の中腹にあり坑が下に延びているため採掘がとても難しい。現在でも採掘がされているが、採掘できる期間が短く困難なため停められているようなものだ。ここから出る硯石は金星、金暈でこれらの石質は少し柔らかい。金暈の色が黄色く輝いていない。金星坑、水蕨坑には劣る。
- 5、碧里坑 (羅紋が出る五硯坑 5)
- 6、緊足坑 羅紋坑の下 80 メートルの所にあり。元代から採掘が始まり、硯石の模様金星、金暈、金罍があり、ある金罍は動物の眼のようで、古人は龍眼と呼んでいる。眉紋が少数あるが、少し柔らかい。硬く豊潤なものの方が上質だと言える。水舷坑、金星坑には劣る。

### 金暈が出る八硯坑

- 1、水舷坑 (羅紋が出る五硯坑 3)
- 2、金星坑 (金星が出る六硯坑 1)
- 3、水蕨坑 (羅紋が出る五硯坑 4)
- 4、溪頭坑 (金星が出る六硯坑 4)
- 5、碧里坑 (羅紋が出る五硯坑 5)
- 6、緊足坑 (金星が出る六硯坑 6)
- 7、外庄坑 (眉紋が出る四硯坑 4)
- 8、濟源坑 (魚子が出る二硯坑 1)

### 魚子が出る二硯坑

- 1、濟源坑 濟溪村の山頂にあり、宋代から採掘が始まりその後一時停められていたが 1982 年その土地の村民が古い坑に残された硯石を発見したことから 1983 年に職人たちが集められ正式に再採掘が始まった。この坑からでた硯石は青い灰色のものと褐色した黄色の二種類で緑色の石も少数出る。この色のほかに硯石に均等に密接した魚子紋のまるものと青い灰色の鰍背紋、褐色した黄色の鱗魚黄、少し緑色の茶末緑がある。これ

らの金暈の色は淡い黄色をしている。この硯坑が貯蔵する硯石の量は多く、全坑の中で産量が一番多い坑だ。

## 2、眉子坑（眉子坑、眉紋が出る四硯坑 1）

上記した以外にも、史料によるとあと二つ硯坑があるらしい。一つは驢坑で今の浙源郷の驢坑村で距離的に驢坑と硯山は数十キロある。宋代の景祐年に採掘が始まり、その採掘が停められた。掘り出された硯石がどのようなものだったか、実物を見た事がないため語る事ができないが、《歙州硯譜》には“この石には青緑の暈がある”と記されていて驢坑石はきっと美しい石であったと思われる。二つ目は庄基坑で元代に採掘され、硯石鉞の後方の山頂にありこの山を庄基山と呼ばれている。この坑はかつて採石時に負傷者を出す事故が起こったため“人食い”の坑と囁かれるようになり、その後この旧坑を“老虎函”と呼ばれるようになった。この坑に残された硯石をみると、模様は細羅紋と短刷絲羅紋の二種類である。

各硯坑から出た同じ模様の硯石を比べると、どの硯坑から出た硯石が優れているのか、劣っているのか区別がつく。羅紋は羅紋坑と水舷坑から出ているものが最も優れていてその次に里山羅紋坑と水蕨坑、そして碧里坑となる。眉紋は眉子坑が一番で次に水蕨坑。そして叶九坑、最後に外庄坑である。金星は金星坑、水舷坑のものが優れ、次に水蕨坑、最後に溪頭坑、緊足坑、碧里坑で金暈は水舷坑、金星坑のものが優れていて、その次に水蕨坑だ。魚子は眉子坑が一番で次に濟源坑である。以上が比較になる。階級順に並べると一等は羅紋坑、眉子坑、水舷坑、金星坑。二等は水蕨坑、里山羅紋坑。三等は溪頭坑、叶九坑、緊足坑、碧里坑、濟源坑と外庄坑となる。当然これは相対的な配列であって、絶対的ではない。もし一等の硯坑から出たものでも硯石が劣っていれば、三等の硯坑から出た上等の硯石と比べると前述した配列とは違った、はっきりした違いがわかる。

羅紋坑、眉子坑、水舷坑、金星坑から出た硯石の模様はすべて同じではないが、この四ヶ所の硯坑から出る硯石の質は龍尾石の中でも上等な部類に属す。当代の人はこの四硯坑から出た硯石を“老坑石”と呼ばれ、同時にこの四硯坑に劣る硯坑から出た硯石を“新坑石”と呼んでいる。ここでは“老”と“新”が優劣を決める代名詞となっている。

老坑と新坑は採掘された時期の違いで分ける事もある。老坑は早くに採掘され、新坑はその後遅くに採掘されたものとに分けられる。この早いと遅い時期の間はというと、龍尾石は発見されて採掘されてから今まで 1200 年以上経過している。そして前述してきた各硯坑で最も後から採掘されたものは 600 年もたっていない。龍尾石の地質形成は今までに十億年くらいある。早くに掘り出しても数百年、後から掘り出しても数百年である。硯石の質には時期は何も影響はない。むしろ後から採掘された硯坑の硯石のほうが質は良い。

老坑と新坑との違いから龍尾石の優劣を区別する要素として歴史の事もある。宋代の時期に龍尾山で開発された硯坑が歴史上最も多い。当時、人々は宋以前に開発された硯坑を旧坑と呼び宋代に開発した硯坑を新坑と呼んで、この新と旧は採掘した時期を指し、その後各硯坑で出た硯石に質の良し悪しの区別をつけた。そして、この区別は旧坑と新坑の区

別で、新しく採掘された硯坑の絶大多数は旧坑の硯石の数には及ばない。このように新と旧は時期の差を指しているが、硯石の優劣の標記を変えることもある。当代の時期は新しく開発する硯坑がなくなると、すべてを古い硯坑で補い採掘が行われ続けた。この時期の硯坑は私たちから言わせてもらえば全て老硯坑である。当代の人が言う老坑と新坑は時間差の概念でもなく硯石の優劣を区別するものでもないように思える。

具体的に硯石を区別し優劣を付けるなら以下の方法がある。一つは見る。石に亀裂や傷がないか、質が雑なものではないか、石筋がないか、石中の模様は美しく純粋であるかを見ればよい。ひびは石病である。硯石の側面にあたり表面にあたりもする。ひびがあるものより、無いもののほうがもちろん上等品である。龍尾石の岩層には麻石や石英が入り交ざっている。質が雑なものではないかとは、この事を言っている。匠が硯石を選ぶ時普通はこういった入り交ざった質のものは避けるのが普通である。混ざっていないものは上等で混ざっているものはこれに劣る。石筋は硯石の線である。線の色は黒と白の二本で黒い線は黒筋、白い線は白筋と呼ばれる。黒筋の硬度と硯石の硬度は近く、実用には何も影響はないし人々には“傷”と認識されてしまうが、見た目は良い。白筋は白石英で筋がとても硬い。硯石の石病で硯材を選ぶ時には白筋があるものは避ける。もちろん石筋が無いものが上等で黒筋があるものは次によく、白石筋はやめておいた方がよい。龍尾石の天然模様は代表的に五つに分けられ、この五つの模様と色にはそれぞれ特徴があり種類別に良いものを選ぶことができる。しかしこれは各人々の好みによる。どの模様や色がよい、何が美しいなどは相対的な標準でしかない。たとえば羅紋の模様は均等していて細かい上に隙間が無く、石色が汚れの無い石が上等である。眉紋の模様は明らかで、疎らにはっきりしていて透き通って光る下色が青いものが上等である。金星は星が多い少ない、大きい小さいものだろうとも金星は金星である。まばらに表れているものから稠密しているものまである。星の色が光り輝いていて黄金色のものが上等である。星が土黄色のものはこれに劣る。金暈の色は金星と同じで光り輝いているものがよい。魚子紋は模様が緻密で均等のもものが上等である。

二つ目は触るである。手で硯の肌を撫でる。硯石が細かく滑らかなものが良い硯石で、撫でると石肌の感触が赤子の肌のようなのであればその硯は美しい石肌と言えよう。このような手に残る感覚を硯の世界では“手感”と叫んでいる。われわれが硯を鑑賞したり品定めをしたりするときは、手の感覚も必要となる。これもまた優劣を決める手段だ。

三つ目は聴く。聴くというのは硯石の音を聞くのである。音を聞くには硯石を左手の五本指の上に浮かせながら持ち（硯石が大きい場合違う方法で）そして右手の人差し指と中指で硯石を弾く。その音が澄んでいればその硯石はよいしである。古人は良い硯石の音を“銅の声”や“磬のような音”などと賞賛している。もし木の様な音、瓦のような音がすればそれはあまりよくない。石の音が澄んでいるということは石質の形成が緻密で石中に傷がないからだ。反対に石質が柔らかく石層に亀裂や傷が隠れているものは澄んだ音はしない。

上等の龍尾石は、傷が無く、質も混ざったものでなく、石筋がなく、模様が美しいものを指す。しかし硯に彫刻をしている作品の中には石筋や雑な質などをうまく利用し美術効果を発揮しているすばらしい作品もある。しかしこれはまた別の話である。

#### 4、龍尾石と他の石の見分け

##### P39

我が国は資源が豊富で硯が生まれる場所がたくさんある。宋代に採掘され出た硯石は多く、その何十種類の硯石の中に龍尾石の模様、色に似たものもあった。龍尾石の名声が高まっていたので龍尾石の採掘が困難になっていた。そのせいで龍尾石に似ている石が歙硯と偽証され市場に流れてしまった。当時の文人学者は宋人の曹継善の《辨歙石説》の“明瞭な見分けをしなければいけない、そして歙硯の賛美を保ち続けなければいけない”を例に、そして元代の江光啓は《送侄濟舟售硯序》で“元十四年・・・硯を求める者は良い硯を求める 良いものでなければ誰も手を出さない。労働者は患っている。暗く足場の悪い困難な環境下で採掘活動をし、黒く粗い乾燥した石を採掘している。そんな石でも高値で売られ、本物の石も少ない。三衢絲石は黒く硬い、南路絲石は暗くどんよりしている。綿潭絲石は柔らかく滑る。天路絲石は赤く枯れていて、水池山絲石は枯れて乾燥している。どれも筆と墨に適していない。こんなものは宝ではない”と人々を戒めた。

歙硯のこの乱れた現象は歴史に必ずあったものだし、今もなお続いている。龍尾石に近い硯石は江光啓の所で述べた以外に江西玉山の羅紋石と星子の金星石、湖北の大沱石、河北の薊州石、山東の砭磯石と淄石などだ。これらの石は龍尾石にある模様と色にとっても似ている。重要な事はもっと細かく識別できるようになることだ。玉山の羅紋石の色は青く灰色で羅紋がたくさんある。この岩層の構成が龍尾石に近いからだ。清代に出現し歙硯と偽証され多く流出した。硯の収蔵家の収蔵品や硯の専門家の書籍の中に以外にも清代のこの玉山の羅紋硯が歙硯だと紹介されている。以上が龍尾石に相似した硯石だ。龍尾石と各石の特性の比較は、羅紋石の色は淡く、模様が単一で透明感が無い。そして石質は柔らかく少し軽い。弾くと瓦の音がする。星子の金星石はほとんど羅紋がないが、羅紋がある石は淡い石色で羅紋がない石の色は黒く透明感が無い。石中の金星の色が淡く黄色に近い。そして石質も柔らかい。大沱石の質は粗く模様がはっきりしていない。石色も黒い。薊州石の色は灰色に少し黒が混ざったような色で透明感が無い。石質は柔らかく弾くと木の音がする。砭磯石の多くは模様がない。模様があるものは浪のようで石色が淡い黒、模様がないものの石色は黒い。淄石の多くは黒く、少数だが黄色い金星があるものがある。

このように各硯石にはそれぞれ各自の特徴があり、違いを見つけ正確に比較識別することができる。

龍尾石と端溪石は硯石の質、紋、色のそれぞれ優れた点がある。龍尾石の地質はカンブリア紀からで10億年前のもので端溪石はデボン紀のもので4億年だ。龍尾石の平均硬度は4度くらいで、端溪石の硬度は3,5度。龍尾石の模様は羅紋、眉紋、金星、金暈、魚子などで

端溪石は蕉叶白、魚腦凍、火捺、石眼などだ。龍尾石の主な色は、青黒く、端溪石は豚の肝の色（古人は馬の肝）である。龍尾石と端溪石はこのように容易に区別がつく。

## （二）実用

### P39

硯の実用性は墨を磨ることである。墨をすることは、墨のもっとも必要な機能であり硯の本義である。刘熙は《释名》で“硯は研ぐもの、墨を研げてこそ硯だ”と言っている。

硯は一種の研磨道具だ。最も早く研磨器が生まれたのは新石器時代だろう。新石器時代の研磨器は石の皿と石の棒で、原始人が穀物や顔料を磨り潰すためのものだった。当時の人々には生活必需品であった。この顔料を磨り潰す研磨器が硯の原形だろう。私たちの祖先は陶器に絵を描くとき“硯”を使っていたのだ。この研磨器は生活必需品として石器時代の道具でこの道具の形式は原始人の素朴な工芸言語を体現している。これが石器時代の文化的特徴である。

硯の実用性と実用性のある形には美しさが体現している。硯の原形から始まりこの両者は共存してきた。実用と審美（鑑賞）は硯の本質的な特性である。実用は硯のテーマで審美は硯のフォームである。この両者が社会的発展、退化によって高められてきた。

硯は漢代に成熟に向かい、硯と呼ばれるようになったのもこの時代だ。漢代では硯の材質が石、陶器、漆、銅であり、石が最も多かった。硯の造形は円形、長方形、亀形など多くあり、多数のものが蓋付で底が三つ足だった。西漢の硯は、形が短く簡素であった。東漢の硯は高く、装飾、彫刻も進み硯の蓋から硯の底まで三つ足があり、多彩な彫刻がされていて浅浮彫、鏤空彫、浅刻などの手法のもので、動物や植物などが彫られた。彫刻工芸は十分精密で美しく東漢の時期は石の彫刻工芸の発展と書道芸術が繁栄した。漢の硯は硯石が多く使われていた。当時の墨は硯石に圧力をかけ硯の上で磨っていたため硯と硯石はワンセットとして使われていた。これは新石器時代の研磨器セットと似ている。

韋誕は三国期の墨作りの名人だ。彼の作った墨には“仲将之墨 一点如漆”と漆のようだと賞賛されている。南北朝の時代、我が国の墨の制作が新たに発展した。このころの墨は直接硯の上で磨れるようになり、硯に付属していた棒はいらなくなった。

墨と硯の実用性、発展、向上、促進は相互作用のようにお互い高めあっていた。南北朝後の墨の形は変わり、それに伴い硯の形式も変わった。また墨の質のレベルも上がり、硯の材質にもっとレベルの高いものをという新たな要求が生まれた。社会的な進歩につれ、人々は本に書かれた墨の色の研究をますます進めるようになり、墨色の良い悪いは墨自身の質量以外に硯の材質も十分に重要だとした。唐代が始まったころ硯専用の石材が使われるようになり、宋代になると硯のための石材が数十種類以上になり、各地で硯石に直面できるようになった。人々が硯を使う時、硯への要求は一つの道具としてちゃんと墨が磨れるのか、墨堂や硯池はそれに対応できているか、ちゃんと研究された石材か否かである。

硯の実用性に関して“研墨”墨を磨る機能と“発墨”の性能が硯のすべてである。

## 1、研墨の機能

### P40

研墨は人の手で墨を握り、硯の上で墨を磨るという行動である。日常生活の中で人々が墨を磨るのに必要なものは硯、墨、水である。ここでは墨で磨る上で主要な針と硯の話をしてしよう。硯は墨を磨る道具であり、そのために必要なのが硯堂と墨池である。硯堂は墨をする所で、墨池はその磨られた墨汁を蓄える所であり、この二つは硯の主体で実用の機能を具体的に表現して、硯自身の存在意義であり同時に硯の新しいフォームの内容の一つである。

硯の美しい形式とは、硯の美しい形体である。硯堂と墨池は硯の実用的な面で必要であり、硯を美しく構成する成分である。硯堂と墨池は固定的な形はなく、硯を制作する者が制作する時に閃いた美しいイメージを写し出すのだ。それは広大な思想空間で硯の形式や硯堂と墨池の形式を練り合わせて表現した多様性のある形である。美しいフォームを持っていて実用的機能も兼ね備えている硯は歴史上にたくさんある。歙硯もその一つだ。“用”と“美”には対立的ではなく統一的に硯に存在する。

現代は科学の進歩に伴い字を書くという文化が硬い筆からペンや鉛筆へ入れ替わった。執務や教育などの場でも効率が上がり高い効果と利益をもたらした。またコンピューターでの仕事や教育へも普及し硯を使う現代人が少なくなった。また硯の実用性が人々の心の中で薄れ、硯は一種の伝統的な彫刻工芸品、芸術品、收藏品または親しい友に送る高価な品として認知されるようになった。硯の芸術的価値が十分すぎるくらい突出したせいだろう。

硯の芸術的価値は各人々の審美観が違うので評価の基準が違ってくる。当代ではすでに硯の価値が実用性から鑑賞性へ移行し硯に硯堂と墨池があるかないかなどどちらでもよいという考えになってしまった。このような観点は硯の実用性と鑑賞性を対立させている。原因として一つは実用の硯の存在と観賞用のものとの区別がつかなくなったこと、硯堂と墨池は硯の実用の主体であり、これがもしなかったら硯自身が消え失せてしまう。鑑賞性が強まれば芸術価値も上がる。これは別物の彫刻芸術品の考えだ。二つ目に硯堂と墨池は形式上、または美しい規律から撰生されたもので、これは何ものにも影響されない、またそぎ落としてはいけない硯の美しい要素である。硯堂と墨池の形式は硯全体の美に関係している。これは全ての硯職人が熟考して出た答えの形なのだ。硯には硯堂と硯池があつてこそ芸術的価値があるのだ。

硯の芸術価値は硯の模様、彫刻にあり、彫刻が多く、細かく丁寧であればあるほど芸術的価値は上がると言われているが。実はそんなことはない。硯の芸術的価値は彫刻が多いとか彫刻が細かいなどではない。彫刻の図案と彫刻の手法は硯を作る職人が硯を作る時に自己的な思想テーマを図案にし、それを表現しようとしているもので、もしくは図案と彫

刻手法が思想に沿ったものかである。だから図案が簡単なもの、複雑なもの、手法が粗い、細かいなどをどのように採用しているのかは根底に職人の思想的考えが決めているのである。硯の芸術的価値が高い、低いのは硯の細かい彫刻などではなく、硯が構成する思想の表現、表現方法の結合、硯石のもつ元々の美しさと職人が加わった時の美しさの結合、実用性と鑑賞性の結合に美の統一があるかないかである。

硯の“用”と“美”はしばしば形式に表れる。硯で墨を磨っている時に硯石の内に潜む美を通観するだろう。“用”と“美”は相互作用である。美しい硯石は発墨も冴えるものだ。蘇軾は《評硯》で“硯は美しく発墨が冴え滑らかであれば他に何もいらぬ。発墨が冴えれば筆を消費する。筆を消費しないのは墨が磨れていないということだ。歙硯は筆が止まることがなく、墨も拒絶しない”と言っている。これは蘇軾が歙硯を使った後に感嘆した思いだ。

## 2、発墨の性能

### P40

発墨は専門用語で、硯で墨を磨るときの一種の感覚、一種の現象、または一種の効果である。当代では、硯はあまり使われないので発墨の理解は簡単なのに墨を磨ると墨をこすするという意味合いが混ぜ合わさってしまっている。墨を“磨る”と墨を“研(する)”は同じである。墨を硯の上を往復して磨るか、回転しながら研磨するかである。発墨と墨をこすことは、墨を硯で研磨する時に感覚と視覚に違いが見えてくる。硯石の石質が粗いと墨を磨るとき、すぐに墨をこすという感覚が襲う。そして磨られた墨汁の中に細かい粒子が漂い書面に適当でないものとなる。硯石の石質がもし堅く細かいものだったら墨を磨ったとき墨汁がなかなか出てこないと思うだろ。このような硯石の現象は“拒墨”といっている。発墨する硯石は堅いが滑らかで豊潤である。硯石の肌には細かい鋒鋦があり使っている時に墨を磨り潰している感じも墨を拒絶している感じもない。龍尾石の優れているものはこれの一例である。宋人の杜綰の《云林石譜》の「葵源石」の篇で龍尾石を“この質は堅く強い、たいていは発墨が良く、金星も貴ぶものだ。石は少し粗いが手で触ると鋒鋦が立っているのがわかる。まるで深い溪の上のようだ”と言っている。また宋人の趙希鵬は《洞天清祿集》で龍尾石を“細かく豊潤な玉のようだ。発墨も油のようで、音もなく磨れる。鋒鋦も老化しない。”と評価している。

それでは発墨はどのような感覚をもたらすのか、清人の施潤章は《硯林拾遺》で“石は堅く豊潤で、墨汁筆をつけ書くと筆が自在に動く。そして使い終わった後、洗うと硯の跡が残っていない”と言っている。これは硯石が硬く豊潤な性能を体現したものである。そして発墨の現象の一つだ。これ以外に発墨の磨るときの感覚と磨ってでた墨汁を使ったときの効果は、一、硯で墨を磨るとき軽い力で早く磨れ、磨るときの音もしなく墨汁も細かく濃い。二、磨られた墨汁は宣紙の上で輝き筆も自在に操れる。墨汁の濃淡の区別もはっきりし趣がある。付け加えるとこれらは、良い硯だけではなく好い墨を使わないとよい発

墨の効果は生まれない。

古人によると硯は発墨するのが標準のものである。龍尾石は堅く豊潤であるものが徳である。歙硯は多くある硯の中でも優秀なものである。南唐の李君主は龍尾石硯を“天下冠”と呼び龍尾石の発墨は美しいものだと讃えた。また宋人の欧阳修は“歙硯が出るのは龍尾溪、この石は堅く重量感がある。そして発墨も良い。前世でも多く使われていた・・・優劣を比較すると、端溪は北の岩の上、龍尾は深い溪の上。龍尾も端溪も発墨がよいが端溪の方が後から見聞きするようになった。”と言っている。

龍尾石を発墨の点からもう一つ特出した点がある。それは用いた後、洗うのが便利で墨が残らず均等に洗浄できるという点だ。これは清人の施潤章も証言しているし、宋人の唐詢早の《硯祿》には“毎回使った墨が水で洗浄でき、手間取らない。端溪石より満足できる”とある。清人の徐毅も同感で“墨漬けにならずに済む”と言っている。

発墨と硯石には一つ主要な条件がある。硯石の生み出す“発墨”そして硯石の優劣は、すべて発墨が生み出す量で決まる。龍尾石と端溪石の評価は歴史上の欧阳修が言ったこと、蘇易簡の説明した話とは同じではない。

龍尾石と端溪石に関わらずそれぞれ異なった優劣がある。例えばある一方の硯石が一級品でもう一方が三級品だとする。しかしそれらを比べても結果は石の出来の評価でしかなくこれは一方的な評価になってしまう。古代の硯評論家は多数が文化人で墨好きであった。彼らは硯の理解には限られたものがあつた。それは彼らの身近な限られた硯だらけの環境下で優劣を評論しているので、前述した一級品と三級品を比較する状況が避けがたいものとなる。それ以外にこの二つの硯に優劣をつける際にそれぞれに好みがあるように偏った愛情がある。これも一方的な考えになる。

龍尾石と端溪石の石質の構成、模様の特徴は明らかなので、端硯、歙硯のどちらを一番の硯にするか、どちらが優れてどちらが劣っているかの優劣を決めたり語る事は非常に困難である。

### (三) 造型

#### P41

造型はその物的な形象であり、また美学的なカテゴリーだ。硯の形象を形作るには実用的な機能と形式的な美が体现してなくてはいけない。

硯の美しい形式には、二つの表現があり、一つは硯の材質が美しい事、二つ目は硯の制作が美しい事である。硯の素材が美しいと制作が体现してくれる。硯の制作が美しいのは材質の成果を受けているからだ。古今を通じて硯の材料は多く、同じものはない。硯の制作手法もまた違う。材料は石だけではなく陶器、瓦、銅、または鉄などもある。造型、彫刻には“加”“減”の制作方法を使い形を作っている。石の材料から硯の形象を作る時には“加”加える事ができないので“減”の手法を使うしかない。歙硯の形象の制作と模様の彫刻は“減”の方法で行われている。

## 1、歙硯の造型の多様化

### P 41

歙硯の造型の形は多く、その中でも大きく分けて幾何形、仿物形、随形、自然形の四つが代表的なものだ。

幾何形は規矩形とも呼ばれ、具体的な形は円形、楕円形、正方形、長方形、六角形、八角形、梯形などだ。

仿物形はある物体に真似て表現したもので、生物だったり静物だったりを真似ている。例えば亀形、鵝形、蟬形、蟾蜍（ひきがえる）形、竹節形、蓮葉形、琴形、古鐘形、箕形、餅形、瓦形などなど。随形は石の形体を気の向くままに制作した形だ。規定的な形はない。仿物形でも自然形でもないものを指し、この種の硯の形は様々である。自然形は硯石の自然な形態の趣くままに、そして人が加工した事を隠しながら自然の美を体現させる。自然形の硯に同じものは二つない。だが自然にはまったく同じ美しさはないが、美しい事が自然形の前条件である。龍尾石の外形は直線が分割した多角形が多い。このような多角形は形式の中でも多数が美感をもたない。龍尾石の形式で美感があるものは、幾何形、仿物形、随形の制作に多い。自然形は歙硯の他の造型と比べると少し珍しい形になる。

それぞれの造型にはそれぞれの美があり整っていて威厳がある。仿物形は、はっきりとした優美がある。随形は抽象的でロマンがある。自然形は人間技ではない美しさがある。さまざまな造型、さまざまな美感が体現できているのは歙硯の制作過程に反映した職人の聡明な才知があったからだ。

歙硯は唐代で初めて生まれた。南唐、北宋時代まで硯の採掘にかかわらず硯の制作もすべて歴史上最も栄えた時期だ。この時期に歙硯は皇室、貴族、文人雅士が珍重するものとなり、人々はそれに伴い歙硯の優れた硯を光栄であるものとし収集した。したがって歙硯はとても早い時期から收藏品として扱われるようになり単純な実用品ではなくなってしまった。宋代、歙硯の造型が豊かになり装飾、彫刻も精美なものとなり、これらが硯に要求された。米芾は《硯史》で“唐の《文房四譜》、今の《歙州硯譜》見て《歙州硯譜》に載っている歙硯の造型は端様、舎人様、都官様、玉堂様、月様、方月様、龍眼様、圭様、方龍眼様、方葫芦様、八角様、方辟雍様、馬蹄様、新月様、眉心様、球頭様、宝瓶様、笏頭様、風字様、古銭様、外方里円様、筒硯様、石心様、瓢様、天地様、斜斗様、銀錠様、蓮葉様、蟾蜍様、辟雍様、犀牛様、鸚鵡様、琴様、亀様などである。この多くの造型の中で幾何形が多数を占め長方形のものが比較的多い。長方形は歙硯の代表的な造型と言えよう。その理由に一、龍尾石の自然分割した多くの直線が硯石の両面を平らにするので長方形に適しているのである。二、当時の人々は硯に対し審美を要求し“硯は整っているものを貴い、素朴なものはそれだけで美しい”とし、宋代以後は長方形の造型が歙硯がずっと受け継がれ、愛され続けた。

明清代、歙硯の造型と宋代のものとを比較しても大きな突出したものはない。幾何形を主流に仿物形、随形と自然形は相対的なものを要する。ただし具体的な形状は違い、新機軸を持ち出している。

同じ造型でも明清の硯と宋の硯の違いは1、宋硯の体積は小さいが明清の硯は大きい特に明代のものは大きい。2、長方形を例に挙げると宋の硯には整ったものに変化を求めている。硯の正面と反面、前面と背面の尺度が少し違い、正面は大きく反面は小さい、前面は小さく背面は大きい。明代の硯は整っていて厚く正面、反面、前後の面の尺度が同じで変化はない。清代硯は宋代のまではないが正、反、前、後が違い明の硯ほど厚く重くもない。長く幅が広く高いものが重要視されている。

明清の硯のここでの新機軸は伝統を引き継ぎながら新しいものを創っていくことを指している。この新機軸は硯堂と墨池の形式と彫刻を表現するには主要なものだ。たとえば長方環渠硯、正方井田硯、長方花瓶硯、長方玉堂硯、長方花辺硯、長方三星拱月硯、長方太平有象硯などで随形は錦吏封事硯で仿物形は鵝硯、龍珠硯、蓮葉蟬形硯と自然形などに表現されている。これらの形式には装飾、彫刻が重要視され彫刻の緻密性を追求している。これは明清硯の大きな特徴である。それ以外に明清代の歙硯には古いものに真似た仿古硯の制作が出現した。仿古硯は造型と模様を似せる事が主要である。《西清硯譜》では仿唐八棱硯、仿宋天成風字硯、仿宋玉兔朝元硯などたくさん真似された。仿古と古いものを重ねることが流行した。

現代の歙硯の造型は伝統から継承した基礎を持ちいり新しく発展している。造型の種類を見ると幾何形、仿物形、随形、自然形の四つに他ならない。その中でも随形と自然形が多く見られる。随形硯の具体的な硯名は通常、硯の図案で呼ばれる。例えば松鶴硯、浴牛硯、荷塘蛙鼓硯などで硯の形体に大きく珍しい現象が出現している。仿古硯の制作は造型や装飾に止まらず、旧工芸を真似、細部まで模倣しているので本物と見分けがつかなくなっている。

## 2、歙硯の造型の図案模様と彫刻法

### P 49

図案は歙硯の造型過程で装飾が美しくなる。彫刻はその図案を硯に再現する手段で、図案はある種の美で彫刻も美である。硯の造型は図案の美しさが彫刻で体現し彫刻の美は図案の中にあり両者は相互依存し相互作用している共同体である。

図案と彫刻は多種多様である。図案の多様性は形式で彫刻の多様性は手法の事を指しており、それぞれの図案と彫刻手法にはそれぞれの美感がある。硯の造型ではどのような図案でどの手法を用いるかは硯石の材質の特徴が決め手である。

龍尾石の一枚板の岩は側面の硬度は堅く彫刻が難しいので硯石の多くは板の層を平らに採っていく。なぜなら歴代の歙硯の造型では図案模様は一般的に硯の正面、反面の両面のみで側面には彫刻はしなかった。硯に何も彫刻図案がないものは「素硯」と呼ばれ、唐宋

の歙硯には多く見られる。素硯の造型そのものが図案である。一見、図案も装飾もないように見える花瓶だが、そこには浸透している素朴な美がある。その美が素硯にあり、彫硯には彫硯の美がある。ただし歙硯の彫刻手法には石質の特徴のため手法に制限があり、円彫、高浮彫、鏤空彫などはできない。硯石にひびが入ったり割れたりしてしまうからだ。なので、歙硯の彫刻法は浮彫、浅浮彫、陰刻など石材と相性のよい手法をとっている。同時に彫刻、図案も簡潔なものになり、きれいで大きく上品な特色がある。

歙硯の図案形式は多様で具体的に分けると連続式、対称式、適合式、独立式、組合式などだ。連続図案で多く見られるのは、二つが連なっているもので、模様は双鉤紋、回紋、万字紋、連珠紋、纏枝紋などだ。対称図案で主要なのは夔紋、鳳紋、龍紋などで、この二つの図案は一般的に硯の正面の周りに彫られ、長方形、方形、楕円形、円形に多く用いられる。図案は正面または背面に装飾される。また硯堂や墨池をうまく溶け込ませた図案もあり、実用と審美がお互いに美しさを発揮させている。例えば、古鐘硯、太平有象硯、宝鼎硯などである。浅浮彫と陰刻の手法は背面になされ力強い装飾性と鑑賞性を与えてくれる。この形式を背花彫と呼んでいる。端溪、洮河硯にも用いられる。独立図案は総体感が強く仿物造型がこれに属する。例えば荷葉硯、琴硯、蟬硯、鵝硯などだ。組合図案は楕円硯に多く見られる。図案の物体形象は豊富で山水、人物、太陽、月、星、雲、鳥類、獣類、楼台殿閣、木や石、龍、鳳凰、神、仙人などなどある。画面が活気にあふれ生気に富み惚れ惚れするものが優れた組合図案にはある。

当代、歙硯の彫刻の多くは組合図案で歙硯の主要な地位を占めている。これは現代人の審美の意識なのか、図案の彫刻が硯の美だと認識してしまう傾向があるからだ。この審美概念が“蘭亭”“蓬萊”の硯の六面に彫刻をした水人物硯を出現させた。長期続いた歙硯の概念を打破し“蘭亭”は蘭亭硯と呼ばれ“蓬萊”は端溪硯と洮河硯の専売特許だけではなくなくなった。これは歙硯の彫刻芸術の進歩と発展と言わざるを得ない。当然、龍尾石も蘭亭硯の制作はできるが難しく全ての龍尾石で蘭亭硯が出来るとはいえない。眉子坑、濟源坑の硯石、また硯石の質が雑ではない眉紋石と魚子石は向いている。この二つの硯石は硯の側面も彫る事が出来るが、彫る際に苦勞する。この側面の彫刻の図案形式は歙硯に彫刻をする試みであって発展と言う方向ではない。

これ以外に硯に銘文を彫る事も装飾の美の一つだ。明代から硯に題や落款を彫る事が始まり、文字を硯に彫る事が装飾となり清代には硯に詩、題辭と跋が陰刻手法で表現され広く人々が愛好するところとなった。書家達が次から次に刻硯を始め硯の彫刻芸術の発展を促進させた。高鳳翰、紀曉嵐などはこの時代の代表的な人物で彼らは収蔵硯、刻硯、作銘だけではなく、自己の《硯譜》も世に広めた。

彫刻の手法は硯の図案、模様を体現するものである。図案、模様の形式はとても多く彫刻の手法も同じく多い。図案、模様はいくつかの彫刻手法で表現するが、手法が違えばその図案、模様の美感もまた異なってくる。彫刻手法は図案、模様が硯に適したものに成るか否かの必須作業で、また、図案が美しくなるかはこれに懸かっている。

浮彫、浅浮彫、陰刻は歙硯の彫刻で頻繁に用いられる手法で、この手法は単独で使われ硯の造型、図案を決める。幾何形の図案に多く、二方連続と対称式の花辺模様の彫刻にも使われ、効果は大変よい。仿物形、随形と自然形硯の図案には浮彫と浅浮彫が多く、一部には鏤空彫の手法が用いられる。適した彫刻法を採用した方が豊富な表現ができるのだ。

歙硯の多くが使われている彫刻手法は硯石の特性に適したやり方で、さらに硯の実用と審美を追及している。硯を使い終わった後洗浄が必要であるが、古人はこれに対し深く研究をした。“たとえ三日間硯の顔を整えなくても、一日とて洗浄を欠かす事はできない”と言っている。また硯を眼で鑑賞し、手で賞玩する。これは硯を鑑賞する時に使う言葉であるが、実用に対しては言わない。観賞用としての硯を作るために、硯の彫刻を深すぎたり空間を多く作ったりする事は無駄なことである。というのは撫でる時、また使い終わった後洗浄する時に壊れたり手を傷つけてしまうからだ。硯の実用と鑑賞の点から言えば硯の図案、模様が“簡潔”“複雑”であろうと彫刻手法が“粗い”“細かい”であろうとも彫刻は全てまろやかで円滑なものが求められる。洗浄するのも便利で、鑑賞する時も手を傷つけないものが重要である。歙硯の伝統の彫刻手法はこのような効果を体現して後世に継承しないとイケない。

歙硯の造型、図案、彫刻は全て各自身の特徴があり、歙硯にあるそれらの名前や“精細で秀逸”な伝統的な風格をした形式も見て取れる。この風格の主要な要素は一、龍尾石の材質の制約を理解する事で硯の造型と彫刻が生み出す自身の特徴である。材料と制作工術が適していなければいけないが、これを古代の芸術家は早い時期に身に付けた。二、地方文化芸術の影響。歙硯には地方の文化形式によって作られているが、一千年以上の時の流れで発展も変わってきた。また時代に残された痕跡だけではなく濃く現れた地方の色彩も変わっている。この図案の内容、図案の形式、彫刻手法などは婺源である徽歙地区の木彫り、煉瓦彫り、石彫り、徽墨、刺繍などの図案内容、図案形式や表現手法に酷似しているところが多い。歙硯の精細で秀逸した伝統の風格は徽歙区の文化芸術の風格を収縮したものと言える。

彫刻の風格の事を語ろうと思うが、その前に硯の彫刻の話をする必要がある。彫刻はひとつの技術でもあり芸術でもある。硯は実用品、工芸品または芸術品でもある。ただし技術は芸術と同じではなく工芸品は芸術品と同じではない。人々は彫刻のある硯、観賞用の硯を見る時にしばしば技術と芸術の認識が曖昧になり“工が芸に代わる”現象が起こる。この現象は当代の硯の制作にも存在し時に突出する。この現象が起こった主な原因は当代人が硯を使わなくなり、硯を鑑賞や収蔵品として硯に鑑賞性を持たせ、正確な認識が出来なくなったためだ。そのため、しばしば度を越えた観賞用の硯や彫刻のみを追求した硯が出て、見た目ばかりを気にする鑑賞的な工芸品が発展してしまった。彫刻芸術品として一歩を踏み出そうとして踏み出しすぎて、すでに硯とはいえない代物になっている。どんな物事の発展にも度があり、その度を越えてしまったら違うものになってしまう。硯の彫刻形式の発展にも言えることだ。

硯の造型、図案、彫刻の発展と新機軸は硯の本義と切り離せない。歙硯にも同じことが言える。当代では硯の制作で工芸が芸術に取って代わるという現象が起こっている。これは歴史上でもあったことでこのような現象は歙硯の彫刻の風格を代表しているものではなく、発展へ向かっているものでもない。これは図案が煩瑣し内容が卑俗になり彫刻のレベルが下がっただけである。私達が歙硯の伝統を継ぎ彫刻の風格を保ち続けるには駄目なものを取り除かなければいけない。

私がここで言った“工が芸に代わるの”工は硯の彫刻工芸を指し、また芸は硯の芸術性を指している。硯の形式には芸術から感化された思想や情感が表現されている。彫刻技術は硯の制作中のひとつの表現手段で硯の形式は彫刻技術の体現によるもので、技術の優れているものは人々を驚かせる。また芸術の美しさは人々の共鳴と美の連想を奮起させる。硯の彫刻技術はそれらの芸術性と同じで必要なのは着想、構図、思想のメインテーマを表す形式的な美、そしてそれらに適した彫刻技巧である。技巧は技術が熟練していて作業が巧妙である能力のことで、彫刻の際に刀の扱い方に注意を払い豊富な変化で美感を表す力だ。硯の芸術性は着想の美、形式の美、それと制作の美で体現されている。

歙硯で作る一種の伝統的な彫刻工芸品は優良な材質とそれに適した制作手法で表現すれば大変よい実用的な価値、鑑賞的価値と収蔵的価値が体現する。硯の収蔵的価値は三つの主要な表現がある。一つは硯石の材質美。よい硯石には彫る事はしない。それだけで収蔵的価値があるからだ。出てきた硯石をびかびかに磨き滑らかなものし、なにも彫らない硯石を“光板硯”または“硯板”と呼ばれている。長期にわたり硯板は歙硯で特殊な形式の一種となり、この形式は宋代にはすでに流行りだしていた。一般に硯板にする硯石は、硯石の模様が十分美しいもので彫刻など不要のものか、硯石の表面の模様がすばらしいのだが硯石の層に雑質層があり彫ることが出来ないものだ。二つめは制作の人工美だ。硯の造型による彫刻の模様は硯の実用と鑑賞の整った形式、また整った統一されたところに美がある。硯の大きいか小さいかの追求には精美はない。作業に価値を付けるのなら一つに芸術性のある硯を作る人が名人である事である。もう一つは、硯の思想性は問題にはならないが、硯にとっても強い形式美があるかで収蔵的価値が決まる。三つめは古硯。古硯も前述した二つの要素を含んだものに限るが全ての古硯に収蔵的価値があるわけではない。なぜなら今日の新硯は明日の古硯なのだ。私達は硯の年代だけではなく硯自身の価値も収蔵しているのだ。古硯は史料的価値もある。それはその時代の造型、装飾が表れていたり地方の代表性や制作手法の特殊性がわかったりする。また刻硯の有名な作品と名人が使った硯、有名な人が落款をした硯なども史料的価値があり、また収蔵的価値もある。

### 3、歙硯の発展工程で生まれたいくつかの変化

#### P57

歙硯の造型は豊富で多様である。四つに大きく分け幾何形、仿物形、随形、自然形ある。そしてそれらの違いを述べ、さらに細かく分けた。ここでは造型の発展の脈絡をはっきり

していきたい。ひとつの脈絡から同じ造型でも異なった歴史や産出された時期の形式上の変化がわかり、この変化は継承されながら発展し、ひとつの新機軸を打ち出しそれぞれ異なった歴史や時期の人々の生活習慣、審美の意識が硯に体现されている。この変化は全てを否定してまったく新しいものとして作り出したというわけではない。次に歛硯の代表的な造型の形式と発展しながらの変化を記す。

## 箕形硯

箕形硯は唐代の硯の代表的な形式で前のページの挿絵がそれだ。この造型は人々の生活の中で用いられる“ちり取り”のようで上が狭く下が広い、前が低く後ろが高い。硯堂から墨池にかけて斜めになっていて深く広い。底は三つ足で前に大きい足、後ろに小さな足が二つある。足は方形と円形の二つの形状があり、具体的には方頭方足、円頭方足と円頭円足の三つがある。龍尾石に適しているものは円頭方足と円頭円足だろう。1976年に安徽合肥の唐の墓で発掘されたものは円頭方足の箕形歛硯だった。

箕形硯は仿物造型に属する。硯にはなにも彫刻や装飾がないが典雅であり、威厳のある実用的な形だ。この箕形硯は唐代で広く流行した。しかし箕形硯の造型は晋の時代から始まっている。唐代はおそらく発展し成熟した時期と言えよう。米芾の《硯史》では“鳳字硯に二つ足があるようなものがあり、鳳凰池にもある。これは晋代の造りだ。また右軍硯も晋の図面と同じものがあり、また智永硯は頭が少し円形で、箕形の種類は隋唐の後期のもので作りが巧妙である。頭が円形で少し痩せていて、足が円柱である。朝代に変成し高くアーチ状になり腰のところが痩せていて鉞の刃のようだ”と記述している。箕形硯は隋唐から宋代にかけて発展し形式は変化した。具体的な形式は高くアーチ状になり腰の所が痩せ鉞の刃のようになった。実物を見てみると箕形硯は宋代または朝代で二つの硯へと発展した。ひとつは方頭の梯形で“箕形抄手硯”もうひとつは円頭で上が狭く下が広い“鳳字硯”または“風字硯”である。箕形硯の三つ足はこの二つの形体にはすでになくなっていて箕形抄手硯の底部の両側と前の端とがつながり硯の縁となって支えている。鳳字硯は平底になり墨池だけが加わっただけの硯になった。

もう一度話しを箕形硯の三つ足にもどす。これは硯の重さも減りまた落ち着いて使える。三つ足の形式は箕形硯だけの特有なものではない。漢代（東漢）の硯の多くは三つ足、三つ足以上あるものもある。硯には蓋がついており、蓋には取っ手があり取っ手に足、硯本体にも彫刻がされたものあり造型は美しい。硯にある三つ足が生まれたきっかけをある人の解釈によると、古人は地面に座っていた習慣があったかららしい。この解釈では納得できないところがある。なぜなら人々が文字を書く時、地面に座っていた人だけではなく机に向かって書いた人も多かったはずだ。地面に座っていても、机に向かっていても人の上半身と文機の距離はかわらない。硯は側にきちんと置かれているもので足があるかないかは、地面に座っていようがなかろうが関係ないのだ。東漢の時期、人々の生活で用いられている道具は硯の造型と相似しているところがある。例えば漢代の鏡箱で、円形、形体が

高く、たくさんの層があり上には蓋、下には三つ足があり彫刻もされている。まるで獣の足のようなものである。鏡箱は銅製と漆製があり、銅のものは酒を入れるつぼ（酒樽）で酒の保存などに使われた。漆の鏡箱は化粧品の収納に使われた。その他、照明用の筒灯、提灯などにも蓋や足がある。またこれらの器具の造型、彫刻、模様はすべて豪華でとても美感がある。硯の造型、彫刻もひとつの伝統や流儀を受け継がれている。このような足あり蓋ありの造型は当時の生活では実用的に重要であった。そしてこの時代のひとつの審美の意識が体現したのがこの造型である。硯に三つ足がうまれたのは、蓋がうまれたからである。

箕形硯の三つ足は漢硯の三つ足の発展の延長にあるものだ。漢硯の三つ足は正方形で彫刻もある。箕形硯の三つ足も正方形で前の端に大きな足、後ろに二つの足が柱のように内側にある。彫刻はない。漢硯の三つ足と箕形硯の三つ足の形式は異なっているがそれぞれ硯の整体形式は十分調和が取れていて美がある。

硯の三つ足式は宋代でも制作され製造が異なった、または変化した足の形式になった。

## 抄手硯

### P57

抄手硯は宋硯の中で代表的な造型のひとつでまた歙硯の中でもすばらしい典型的な形式でもある。抄手硯の形成と発展は終始歙硯の発展史の中に貫かれて存在する。抄手硯は挿手硯、太史硯とも呼ばれる。この名前は硯の機能から来ており硯の底部が斜面に掘られたように空間があり、両側と前の端が地についている。軽いので持ち運びも便利だ。しかしこの名称は史料の中にはいつ発現したのか文字におこしてはなくまた、民間の中でも知っている人はいない。多くの呼び名がいつの日か抄手硯という名にまとまったのだろう。太史硯の名は古代の官衛である太史からきており宋代に官衛からとったと思われる硯の名が比較的多かった。唐續の《歙州硯譜》に載っている硯名は舎人や官僚のなから付けられたものばかりだ。歴史上で呼ばれている“官硯”は太史硯と同じ種類の硯だ。官衛が付けた硯名とも言える。

抄手硯の具体的な形式は多く、初期、中期、後期と三つの時期に分けられる。初期の抄手硯は梯形で下が広く上が狭い。硯堂と墨池が連なっていて斜面式（これを淌池とよぶ）で、硯の四つの側面から内に向かい収縮している。抄手の空間は硯堂の斜面式のように、この硯の外形と硯堂の形式はすべて箕形硯に似ている。これは箕形硯の新発展である。それは箕形抄手硯と称されている。箕形抄手硯の硯堂は深く広いため実用に優れている宋代の早期に移ると抄手硯が長方形に変わり、これが中期になる。硯の高さが高くなり、大きさが小さく硯堂が平らになり墨池が狭く小さく深くなった。具体的に分けると宋式と明式の二つがある。宋式抄手硯の長方形は長方形に見えるが実際は標準的な長方形ではなく、硯の面の下が広く上が狭い。硯身の後ろが高く前は低い。この広い狭い、高い低いという差は、はっきりしていない。幾何形もしくは梯形は事実上の箕形抄手硯の発展が生んだものである。箕形抄手硯と長方抄手は少し似ているが、もっとも突出した点は硯堂が深く広い、

硯堂が平らで浅いかと、硯堂と墨池が連なっているか分離しているかである。長方抄手の硯堂は平らで浅く墨池は狭く小さい。これは宋代の歙硯に共通する形式で宋人の硯に対して実用と審美を求めた結果である。実用性から言えば抄手硯の墨池は狭く小さい。しかし少し深いので一定の墨汁を溜めることが出来る。硯堂は平たく浅いため墨が磨りやすく筆に墨を付けやすい。もし小さな字を楷書で書くのなら墨池に溜まった墨だけで十分だ。審美の点から言うと、平らで浅い硯堂は満足のいく美しさがあり、狭く小さい墨池も深さがあり精神性を感じる。この両者が円滑的な曲線で連なっていて、硯の縁が細く真っ直ぐに統一されている。線と面で整った造型になっていて彫刻などは一切ない。最も簡潔な手法で清新さを表し、典雅で美しい。宋代文化芸術と工芸美術の風格が体现されている。歙硯の精細で秀逸した風格も形成している。

明代の抄手硯の形式はきちんと整った長方形で四つ角が垂直であり幅が広く、硯堂は宋代の抄手に似ている。墨池は宋代の抄手と比べると狭く浅い。そして硯堂と墨池の接続した線が垂直で少し内に向かい円になるように墨池と連なっている。この墨池の広さと深さは指一本分で“一指池硯”または“一指硯”と呼ばれもする。明代の抄手硯の形式は簡略に改良された。宋の抄手硯の多くは斜面式だが明の抄手硯はアーチ形で橋を半分にしたような弧線である。硯には彫刻はされておらず、整った体形で広く厚みがある。狭く小さい墨池に平らな硯堂で宋代の遺風があり、また雄渾でどっしりとした時代の風格がある。

明代の末期、抄手硯の形式は少しではあるが新しく変化した。形は長方形のままに広くなり、硯の面が玉堂式または門式となり“玉堂抄手”と呼ばれるようになった。玉堂抄手は抄手硯の後期の形式である。玉堂抄手の硯堂にはある程度の深さがあり、墨池は大きい。硯堂と墨池の間に弧線が連なり円滑でふくよかな坂形で硯堂と墨池の間の勾配を“羅漢肚”と称されている。抄手硯の空間は明代の抄手硯にある弧線の基礎であり改良された姿である。これを曲線形という。この曲線により硯の底部の空間に手を入れるとサイズがぴったりと合い心地よい。このぴったり合う曲線に基づいて抄手の形式は人体工学の彫刻工芸の働きに違いない。現代のソファや椅子などの家具もすべて人体の座る体勢から曲線を設計し、制作している。これは設計の新機軸であり、伝統工芸の家具設計からの引用ではない。

清代、玉堂抄手硯の制作は依然続いた。同時に玉堂抄手に似た長方硯が徐々に増えてきた。この長方硯の多くは彫刻があり硯の図案も多様化した。抄手硯の形式だけが消え、硯の背面が平底になりまた四面を残しその端の中間に凹形の池が掘られた。その池の内側や平底に書画などが装飾され、題、落款、銘などの装飾が風習となった。硯の彫刻、図案は審美の内容のひとつになった。抄手硯の硯辺、池の内側、抄手の内側にも彫刻がされた。しかし抄手硯の彫刻の出現は明代が最も早く行った。

抄手硯の彫刻そして、それぞれの造型硯の装飾は明清代の反映からのものだ。そして朝代に工芸化し鑑賞性の発展が勢いづいた。

## 蟬形硯

### P64

蟬形硯は歙州硯の中でも特殊である。まずは先に示した図を見てみよう。蟬形硯は蟬硯や蓮葉硯と称され、蟬とは昆虫の一種である。いわゆる蟬硯とは、蟬のイメージを取捨、誇張、変形させるなどの芸術的手法で、制作の中で生まれた一種の硯の形式である。蟬硯の正面の墨池は独立した左右対称の蟬をモチーフとした形式になっている。上部には蟬の丸い目があり、目と目の間には小さく尖った口が繋がり、その下に墨池が配置されている。墨池は大きく深く、多くの墨を溜めることができ、生き生きとしている。目と胴体の間には、多くの起伏した波紋がある。それらは内側に行くにしたがって薄くなり、それから外側に拡張し、円い硯堂を構成している。硯堂は広くて深く、とても実用的といえる。硯の背面には三本の足があり、それらの配置は唐代の箕形硯に見られた足の形式に似ている。

蟬硯の具体的な形式は比較的多く、それらを大きく二種類に分けると、ひとつ目は、模様の彫刻が施されていないもの。そしてもうひとつは文様が彫刻されたものである。文様が彫刻された硯の主なモチーフは蓮の葉(荷葉)だが、このような荷葉形の蟬硯は歴史上“蓮葉様”と称される。文様の彫刻の形式は、硯の正面だけでなく背面や三本足に彫刻された文様も、彫刻の有無を区別する手掛かりとなる。模様の彫刻のない三本足と、頭と足の丸い唐代の箕形硯は基本的に同じだが、制作の手法に違いがあり、特に二本の小さな後ろ足に差がある。箕形硯の二本の小さな足は円柱形で、蟬硯の小さな二本の足の多くは、足の底から円弧を描くようにふっくらとした線で滑らかに硯本体に繋がる。それはまるで女性の身体のようなものである。小さな二本の足の突起は豊満な乳房、大きな足の方は丸い腹部のようであるため、“双乳硯”と呼ばれることもある。蟬硯の裏表両面の彫刻のモチーフの関係性から、簡単にわかることがある。正面は蟬をモチーフに“垂綉飲清露”や“居高声自遠”という言葉から昔の文人の廉潔さを隠喩している。そして硯の裏は、一種の人間性を表している。荷葉形蟬硯の三本足と、模様の彫刻のない蟬硯の三本足を比べると、前方にある大きな一本足は同じであるが、違いは小さな二本の後ろ足にある。荷葉形蟬硯の小さな二本の後ろ足には倒立した7の形の“荷葉茎”がある。こういった工夫はモチーフをさらに完璧、巧妙かつ斬新にしている。

蟬硯は唐代から制作されてきたが、当時は蟬硯と呼ばれず、蓮葉硯と呼ばれていた。宋代に書かれた米芾《硯史》には、唐墓には蓮の葉があり、中が窪んだ二本の足を鳳池、棗のように作られていた。宋代に制作された蟬硯には、文様の彫刻の施されないものが現れた。明代の蟬硯は比較的大きく、高さがある。模様の彫刻のあるものとなないものの両方が制作された。文様の彫刻のあるものの中でも、荷葉のモチーフを取り入れた手法のものには、裏側に倒立した7の形をした蓮の茎があり、そして葉脈の彫刻がない。清代には、このような荷葉形蟬硯の模様の彫刻手法は細密になり、硯の裏の一面に荷葉の完全な画を形成するようになった。そして工筆(中国の細密な描画技法)を用いて硯の両面に葉脈が彫刻され、まさに一枚の蓮の葉が硯に巻きついているように見える。正面の蓮の葉から覗く部

分は蟬の形の硯堂と墨池で、図案の中の虚形とされる。この虚と実の結合が、実用性と鑑賞価値を完璧で美しく統一している。このような形式は美しさ、さらに美しさが醸し出す思想、情感を人々に与える。このような硯の制作作業を見る度、拍手と称賛をせずにはいられない。

荷葉と蟬の結合は、自然の常識を超えているように感じられる。なぜなら現実の生活の中で、私たちは蓮の葉の上に蟬がとまっているところを見かけるのは難しいためである。しかし我が国の絵画など芸術などの科目では、このような題材は頻繁に使われる。例えば、“松と鶴”の組み合わせには、理想と浪漫が濃厚に充満している。蓮と蟬の組み合わせには、“決して汚れることのない”品質や、“風を食し、露を飲む”気高さを体に溶け込ませ、高尚な賛美は人々に人生の境界を迫及させる。これはまさに蟬硯の創作のテーマである。

蟬硯の呼称は腕組みと同じである。関係する歴史資料には、蟬硯の文字の記載が未だ見つけられておらず、書かれているのは蓮の葉の名だけである。歴史上、蟬硯という名は民間で呼ばれ、このような形式が流行した。米芾《硯史》の中には、“歙人が最も多く制作し、文人が好んだ”と書かれている。宋代には蓮葉硯と呼ばれ、蟬硯とは呼ばれなかった。これは、蓮は縁起が良く、そして硯に実像として表現されていたからである。

しかし、歴代の歙硯の各種蟬硯の造型からみると、蓮の葉と蟬の組み合わせは蟬硯の中でもただの一種にすぎず、蟬硯にはさらに多くの種類が存在し、蓮の葉のないものもある。蟬硯という呼称は蓮の葉よりも包容性があるといえる。このため、蟬硯の中の蓮の葉の有無を論じることなく、蟬がテーマであることからこれらは蟬硯と称される。

## 四、歙硯の歴史と沿革

歙硯は唐に始まり、宋に栄え、明清に衰退し、現代に復興した。このために、歙硯の発展を起源、興盛、衰退、復興の四つの歴史の階段に分けて考える。

### (一) 起源

唐代に書かれた《歙州硯譜》には、こう書かれている。婺源硯は唐の開国の中、狩人の葉氏が長城で獲物を追っている最中に、石が積み重なり砦のようになっている場所を見つけた。それはとても美しく、葉氏はその石を持ち帰り、粗く削り硯にした。そのしっとりとした石質は端溪硯をしのぐ物だった。このことから推測すると、唐開国から(公元713-741年)葉氏が龍尾石を使い硯の制作を始めたと考えられ、すでに1260年以上の歴史がある。葉氏の発見以降、数世紀とく粗硯は受け継がれ、その後訪れた匠の手により硯が作られ、山を下り広く伝えられた。

それ以降歙硯の採掘、製造が龍尾山一帯で始まり、眉子坑も同時期に開発された。唐代の歙硯の製造は端正、上品で、実用性に優れ、箕形硯の代表といえる。

唐の開国中に起こった歙硯の定説は、《歙州硯譜》から生まれた。《歙州硯譜》は現在までに見つかっている歙硯に関するあらゆる資料の中でも、最も早い時期の歙硯の起源を記載している。しかし、硯譜の中の記述には、葉という姓の狩人が狩りの最中に龍尾石と龍尾石の岩石層構造を偶然発見したと書かれている。この二つの現象を照らし合わせてみると、歙硯の最も早い起源が唐の開国中だったということに疑問が生まれる。

龍尾山を訪れたことのある人は誰もが知っていることがある。硯の原料にできる龍尾石、特に葉氏が発見した“瑩潔可愛”といわれるような優良な石は、山の表層にはなく、岩石層の中にしか存在しない。このことは元代の《送侄濟舟售硯序》にも“木の根が土の中にあるように、硯材は石の中にある。まず硬い石を剥ぎ取り、次に粗く硯材を削り出す。石の最も硬い部分には、波のような線がある。”葉氏が発見した龍尾石のある場所は、先人によって既に採掘された古い坑口のそばにあった可能性が非常に高い。つまり、龍尾石の起源は葉氏の発見より以前だといえる。当然、鉄砲水や地震などの要因が硯の原料になる岩肌を露出させた可能性もある。しかし、明代に“博物君子”と呼ばれた李日華は、《六硯齋筆記》にもまた、このような記載がある。“端硯が市場に出回る以前は、歙硯が最も優れた硯であったが、現在に至っては唐代の歙硯は世界に名がとどろく物である。”端硯の創始時期については、清代の計楠が《石隱硯談》の中に、“端溪石は唐の武徳の世に始まる”と記される。このことから類推しても、歙硯の歴史は唐の開国中の葉氏よりも早かったと考えるべきだといえる。

しかしながら、歙硯の明確な起源は、唐の開国中の史料の中には未だ見つけられていないために、安易に定論とすることはできない。異常に記した内容は志の高い方の心の中に一つの資料として留めておいてほしい。新たな発見があれば、真実が明らかとなるだろう。

## (二) 興盛

### P67

南唐（公元 937-975 年）朝廷は専門家を派遣して龍尾山に新駐させ、龍尾石の採掘を組織し、朝廷の役所専用の硯のための玉を彫刻させた。《歙州硯譜》には、“南唐元宗に至るまで書道を愛し歙県を守り硯を献上した硯工、李少微が国主に認められ、周全が硯の製造の責任者となった。以降技術力の高い職人が非常に増加した。”南唐時代には硯のための採掘が一定の規模に制限され、さらに龍尾硯の名声は賞賛を浴び、南唐の後には主李煜によって“天下の冠”と称された。

南唐歙硯の採掘・加工業は政府当局により組織的に推し進められ、その後もほぼ政府当局の組織により進められた。

宋代には普及に基づいて“重文抑武”の政策がとられ、文学や芸術を包括した工芸美術の発展が促進され、全国で硯の採掘・加工業が繁栄に向かい、歙硯もまた大発展の時期に入った。この時期に龍尾山で開発された硯坑は最も多く、各種各様の肌理の硯石が世に出て、硯の造型も多様化した。彫刻工芸も独自のスタイルを確立し、我が国の硯の中でも高

い評価を得た。

## P69

景裕時代(公元 1034-1037 年)、歙州の錢仙芝と県知事の曹平が龍尾石の採掘を組織した。“李氏が採掘を始めた場所には、元々大きな川があったために、採掘坑は常に浸水した状態で、職人が入ることができなかった。そのため、仙芝は川の流れを変え別の道を作った”といわれ、その後採掘が進められた。しかしその後、“県人の病は、川の流れを変えたせいである。川を元に戻さなければ、採掘を止める他ない”という意見から、採掘は中断された。当時、龍尾硯は朝廷への貢物としてのみならず、多くの愛好家や收藏家などが硯を求めこの地を訪れていた。ほどなくして、王君玉の時代に、龍尾山での組織的な開坑、採掘が再開され、“川の流れを戻し、元の道に従い、優れた石を採掘した。”この時の採掘の規模はとて大きく、水舷坑、水蕨坑、馱坑、濟源坑、溪頭坑、葉九坑などは、すべてこの時期に開発された。これらの坑口から採掘された石はどれもとても優れている。続いて、嘉裕の時代(公元 1056-1063 年) 県尉刁繆が龍尾山で硯石の採掘を組織、古い坑口に沿い、採掘を続けた。この時の採掘は歴史的資料から見て、北宋に属する地区内での最後の採掘とされている。しかし実際はこれとは異なり、黄庭堅による《硯山行》の中に一つの啓示がある。黄庭堅の《硯山行》は、彼が龍尾山に赴いた時、当時の龍尾山に対し、採掘や硯の製造の繁栄の様子から得た感情を多くの詩として残したものである。詩の中には、“山麓には百余りの民家が鮑を王に贈る中、それに穴を開け削り形作る技術が生まれ、骨や金を彫刻し石の髓を探った。しばしば 3、4%程しかない良質な部分を選び巧みに粗く切り取る。軽くなく乾燥せず天然な石は君子の如く重く潤う。”太陽は輝き金星が舞い、碧色は端州の紫を超える。”この詩は龍尾山の硯の採掘や製造に栄える様子を描写するだけでなく、当時の人々の硯を制作する技術、龍尾石の材質に対しても高く称賛している。そして、このような情景はまたどのような時に起こりうるのか?《硯山行》からは、その疑問に対する多くの答えを探し出すことができる。“元裕王朝への貢物を人々は現在に至るまで求め続けている。”“つつましいこの硯の地に寄り添い、朝廷は大義を用いた。”元裕時代(公元 1086-1093 年) 嘉裕の採掘に遅れること二、三十年。他にも、“朝廷は大義を用いた”という言葉の中からは、黄庭堅の宮廷での“館閣生活”が想像され、汴京にて校訂される《神宗実録》が、役人により検討された時(元豊八年から元裕六年)またそれが書き直された期間、さらに《神宗実録》の校訂が終了した後、朝廷に命を捧げ龍尾山に硯の採掘に乗り出した際に感じたままを書き記したものが《硯山行》である。このことから、元裕時代の龍尾山の硯の採掘・製造業は嘉裕の後に続く繁栄の階段だったということが見て取れる。

南宋理宗の時代(公元 1225-1264 年) 徽州の謝府知事は、澄心堂の紙、李廷珪の墨、汪伯立の筆、羊頭峰から採掘された硯(龍尾山の旧坑口の付近)を“新安四宝”として毎年定期的に朝廷に献上した。

宋代には龍尾硯を褒め称えた詩が多く詠まれ、先に挙げた黄庭堅によって書かれた《硯山行》を除いても、さらに蘇軾によって書かれた《万石君羅文伝》、《龍尾硯歌》、《眉子硯歌》、《龍尾石寄猶子遠》、蔡襄による《徐虞部以龍尾硯邀余品第》などがあげられる。これらの詩の中では、龍尾硯に対しても高い評価にあわせて、重ね重ね龍尾硯の優れた点を推している。唐積による《歙州硯譜》、曹継善による《歙硯説》、《辨歙石説》、この三篇の専門書には、歙硯の産地に対してや、硯の採掘状況、名品、硯の製作の様子等、多岐に渡り詳細な記述がされ、後の研究者にとって重要な歙硯の資料となった。硯の造形法は豊富で多様化し、《歙州硯譜》の中にも数十種類の記載があるが、これまでに示した造型篇の中で自己作品の紹介しよう。このような硯の製作者に至っては、宋代にはまだ作品にサインを残す習慣がなかったために、硯にはサインが入れていない。そのため、現存する宋代の硯の作者を知ることができない。しかし、《歙州硯譜》の中の“匠手第九”篇では当時の硯職人の名が残されている：“鼎城三姓四家一十一人：劉大、名福城、第三、第四、第五、第六。周四、名全、年七十、周二、名進城、周小四、周三、名進昌。劉二、無官名、朱三、名明。灵属里一姓三家六人：載二、名義和、第三、第五、第六、載大、名文宗、載四、名義城。大容里濟口三姓四人：方七、名守宗、男慶子、胡三、名嵩興、汪大号汪王二。”まとめると、宋代は龍尾石の採掘は無論、さらに龍尾硯の制作の規模、影響、産量はどれも前代未聞で、元・明・清各朝も及ばず、龍尾硯の発展史の中でも輝煌時代である。

宋代に人々が龍尾硯に対し詠んだ詩などの文献の中には、歙石や歙硯の名称がある。では、結局のところ龍尾硯はいつ頃から歙硯と称されるようになったのか？このことに関する資料から推測すると、宋代景裕時代初頭（公元1034年）から宣和二年（公元1120年）の間が浮かび上がる。宣和二年から治平年末までの高原1034年から1067年の間に集中して作られたものと考えられる。理由として考えられるのは：一、南唐時代までは龍尾硯と称され、南唐（公元937-975年）から北宋景裕年以前までの時期に龍尾硯の採掘は一度中断されていることから、州の名物がこの時期に出てきたとは考えにくい。さらに、宣和三年（公元1121年）、歙州は徽州に名を変えたため、仮に州名を名称に用いたとしても、歙硯ではなく徽硯と称されたはずである。二、宋代平時代（公元1064-1067年）当時の婺源県管理官の唐積によって書かれた《歙州硯譜》では、直接龍尾硯を歙硯としている。言い換えるなら、歙硯の総称は宋代景裕時代から治平（公元1034-1067年）の、30年間ほどの間のものである。具体的にどの一年かは未だ確実な資料は発見されておらず証明できないため、確定には及んでいない。

### （三）衰退

P69

元十四年（公元1277年）に至るまで、さらに南宋景炎二年に、婺源県の管理官が汪月山に比較的大規模な採掘を組織した。“発数都之夫力”と龍尾山での採掘に人が集められた。

その結果得た損失は大きく、“過度の採掘により崩れた坑の圧死者の数は絶えなかった”。その後開発された“緊足坑”である。緊足坑は数年の採掘を経た後、不幸も崩れ落ちた。江光啓は著書《送侄濟舟售硯序》の中で、緊足坑の不幸を下記のように記している。“今は元五年十月二十八日の夜、雷のような轟音が聞こえ、川を隔てた家の瓦は震え、鳥や獣も驚いた：数年前、緊足石は既に採掘し尽されたと言職人が予言していたという。予言を信じる者はいなかったが、やはりという結果である。六十年間に二度も起こったこのような事故を、一概には言えないが・・・”その後龍尾石の採掘は中断され、職人たちは川沿いの断壁の石を拾い、硯の制作をするより他なかった。しかし、“硯を買い求める者は、立派な物を好み、選ぶ基準もそこにある”。硯の職人は為すすべなく“旧坑の下の方に落ちた粗末な石を拾った”。そして坑の中から採掘したとして売りに出すと、“思いがけず高値がつく”。このようなことが次々に広まり、偽物と本物が混ざってしまう良くない状況となったが、歙硯の品質を疑う者はおらず、名声を深刻に傷つけることはなかった。元代において龍尾石の採掘は、多くの場合宋代に採掘された旧坑の基礎上に進められた。緊足坑の開発は、宋の後に続く新発展といえる。しかし、“元代の戦争の後、硯の職人はめっきり減り”（《婺源県志》）戦争は人々に災難をもたらし、硯の採掘者や職人が日々減っていった。歙硯の採掘・制作は一度寂寞の局面を迎え、ここから下り坂を転がり始めた。

明代（公元 1368-1644 年）に至っては、歙硯の採掘・制作に関する文字の記載は未だ発見されていない。このことから、現代出版されている沢山の歙硯を語る書物はみんな、明代に龍尾石の採掘はされていないと断定している。このことに対し疑問を抱き、著者は長期に渡り実地、実物の論証、考察してきた。そして、とうとう明代に龍尾石の採掘は行われていたという答えを見つけ出すことができた。具体的に三つの方面から説明しよう：一、1991 年秋、婺源硯の職人たちが、龍尾山で古い硯を見つけた。硯の傍らでは当時採掘に使用されていたらしき、錆ついた工具も見つかっている。そしてさらに、硯坑の隣の岩の表面には、朱元璋の一首の詩も発見された。“朝為田舎郎、暮登天子堂、將相本無種、男息當自強”という言葉に併せて年号“大明万歴”が、粗く、達筆とはいえない筆跡で彫られていた。これは、当時の採掘者によって彫られたものと断定できる。そしてこれこそが、明代万歴時代（公元 1573-1619 年）に、すでに龍尾石の採掘が始まっていたことを説明づける証拠である。二、現存する明代の歙硯から見ると、その規格は比較的大きく、さらに一定の厚みがある。他にもこの世に残る明代の歙硯は、古硯の中でも一定の比例を占め、比較的規格が大きめである。もし、明代に龍尾石の採掘が始まっていなかったならば、このような歙硯はどこから来たのだろうか？例えば明代の硯の石材がそれ以前に残されたものであったとすれば、元代から元以降、なぜまた硯の制作業の中に“川沿いで拾った断壁のかけら”が残っていたのか？さらに現存する実物から見ても、明代に龍尾石の採掘がすでにされていたはずといえる。三、龍尾硯の制作の中でも、明代には鄭長青や葉壤など硯作りの名人がたくさん現れた。葉壤が残した“婺源外庄人、龍尾硯精巧素擅名・・・壤巧悟天授、制多獨創、精妙絶論。”（龍尾硯を褒め称えている）（《婺源県志》）という詩から

も、長期に渡り龍尾硯制作を続ける刻硯者と、ただ落ちていた石を拾っただけの“残圭断壁”とは程遠いことが明らかである。ましてや“沿流掇拾残圭断壁”に頼り制硯する職人たちなどは、資料の記載だけでなく当時のことを筆者の見解から説明すると、元代の一時期の現象に過ぎず、明代の二百数年間にこのようなことは行われていないであろう。大きな疑問である。

清朝乾隆時代以前の龍尾石の採掘は未だ確認されておらず、この時期歙硯の生産は低落の一途に置かれていたことがうかがえる。乾隆時代（公元 1736-1795 年）乾隆皇帝による“天下の文明支配”、さらに“臣工は主張を自分の胸に納めた”。そこで、“硯を買い求めるならば、書齋を用意する”ことが前提となっていた。“以前は大中丞の孫委だったが、実際には太守の楊が副支配人になり、続いて大中丞の陳、劉などの役人が皆、貴族の蔵に眠る古硯や硯山住民が所有する古硯を買い取った。”（清徐毅《歙硯輯考》）例えば《西清硯譜》には、明代に唐寅が使用したすべての硯はこの時徴収した物であり、このような硯にはさらに乾隆皇帝の御銘が刻まれている：“歙之石、龍尾最、式肖瓦、漢制派、董（董其昌）以書名、唐（唐伯虎）以画径、二人用淬、妃快何来・・・乾隆御銘。”

しかし、民間に残る硯のみでは数に限りがあり、朝廷の需要を満たすことができなかった。そのため官府は再び龍尾石の採掘・制硯の開発を始めた。清代の学者、程瑤田は《紀硯》の中に：“乾隆丁酉の夏五月、都から歙州へ帰り着いた際、龍尾石の採掘・制硯の現場に出くわした。それらは朝廷への貢物のために行われているが、その掟を破り自ら加工した硯を密売する者もいるようである。”と記している。この時の採掘の規模は未だ明らかになっていないが、この文章からは硯が規則として政府に徴収され、貢物にするために作られていたことがわかる。このことから、この時期の採掘も決して小規模でなかったことが予想される。

道光時代（公元 1821-1850 年）、歙硯は依然として朝廷への貢物として献上されていた。《歙県志》には、：道光時代には毎年三回、一回につき二組、六方を四箱、二方を二箱、全部で二十八方の歙硯が定期的に朝廷に献上されていた。しかし乾隆時代の後から光緒年末までの時期の龍尾石の採掘を裏付ける記載は未だ確認されておらず、この時期に龍尾石の採掘が行われていたかどうかは後の研究者の解明を期待しよう。

1910 年頃、安徽の軍閥の元官僚、馬聯甲が婺源に駐屯し龍尾石の採掘のために山へ踏み入った。しかし、軍隊は石の採掘に関しては素人だったために収穫は少なく、正規の採掘とすることはできなかった。民国初期には“硯山には鮑氏が住み硯を作っているが、良質な石は既に取り尽くされてしまった。”と記されている。（《婺源県志》）その後“解放”直前まで龍尾石の採掘の記録はなく、硯の職人も日に日に減少していった。一世を風靡した歙硯だが、ここで一息入れることとなった。

元代から清代末に至る歙硯の衰退は主に採掘・制硯の規模に現れた。しかしこの期間は歴史的にみると歙硯の彫刻、工芸技術が発展した時期ともいえる。明代より歙硯は造型、紋様などの装飾性を重視し、硯の鑑賞性、工芸、芸術性を発展させた。美しいとされる歙

硯の多くはその特有の文化を内包し、表面に表さないことを形式美とし、職人の才智を硯の表面に彫刻として表現しなかった。葉讓は明代を代表する硯の彫刻家であり、汪復慶は清代の硯の彫刻家の中でも最も優れた者であった。例えば《婺源县志》の中には：“汪復慶は龍尾山に住み、優れた硯の彫刻技術を作っている。良質でない石や採掘されたままの石でさえも、鳥獸、植物、昆虫、花卉などすべてにおいて精密で丁寧な彫刻を施した”と記されている。葉讓の“精巧素擅名”から汪復慶の“良質でない石や採掘されたままの石でさえも、鳥獸、植物、昆虫、花卉などすべてにおいて精密で丁寧な彫刻を施した”まで、現存する明清時代の歙硯から関連する硯の資料には、すべてにおいて簡潔で飾らない美しさと歙硯の繊細さに秀でた風格を彫刻に追い求めたことが表れている。

歴史上歙硯の採掘・制硯業は幾度となく中断され、衰退化が進んだ。採掘の中断には政府の動きが関係しており、戦乱が起こる度に採掘が中断されたことが原因として考えられている。：太平盛世時、歙硯の採掘・制硯業はいきいきと発展していった。歙硯の採掘・制硯業の勢盛衰退には、歴代の官僚の組織作りが密接に関係しており、そしてまた龍尾石の採掘の問題や硯の出来も関係する。つまり、原因は多方面にあった。

龍尾石の採掘の状況からみて、南唐北宋時代が硯坑の開発が最も多かった時期と思われる。元代に新たに開発された二ヶ所の坑口は明清時代の後現代まで採掘されつづけ、南唐北宋時代に開発された硯坑の多くも、現代まで採掘が続けられている。南唐北宋時代は政治的には軟弱な時代だが、文化、芸術分野の発展では、中国の歴史上最も輝いた時期のひとつといえる。歙硯は朝廷や文人、貴族などの寵愛をさらに深く受け、伝統的彫刻工芸品としての地位、形式を確立した。これは間違いなく歙硯の採掘、制硯業にとって発展のチャンスとなった。そして嵐のごとく採掘、制硯業は巻き起こり、歙硯は歴史的な繁栄の時期を迎えた。

しかし、龍尾石の採掘は難易度が高く、それは歙硯の発展に制約を与えた。龍尾山はどこからでも硯石が採れるわけではなく、局部的にしか採掘することができなかった。そのような局部的な硯石を発見し、まず現地調査を行い、次に山の表面を削り、土の層を掘削し、良質でない石を硯の材料となる岩の層にたどり着くまで削り、やっと本格的な採掘が始められる。理想的な硯坑を開発し、たったひと塊の上質な石材を採掘することですら簡単ではない。宋人である洪景伯は《歙硯説》の中で、当時の採掘の難しさを綴っている。：“ごつごつとした三尺の石の中に、数寸ほどに過ぎない硯石や玉が隠されている。坑の奥深くに流れる谷川は、冬になると水が涸れるため、二、三十人で工事を行う。一度工事を行うためには、三日間雨が降っていないことが条件とされる。雨は坑の中の溝を埋め水たまりとなり、作業を妨げる。これでは金銀の採掘者の倍は必要である。”この他、採掘中には坑が崩れる事故や、毒物に侵され死者が出ることもあった。宋代の採掘時には、毒物に侵され相次いで十数人が亡くなった。当時人々は、これらの不幸を神が硯の採掘者に与えた罰と考えた。しかし、このような災難を避けるために彼らができることは、ただ加護を求め祈ることだった。“採掘には、まず生贄を供え、厄日、吉日を選択し、山麓に十数の祭

壇を設け、そこに食物を供えた。”しかし、だんだんと蜂や蛇の毒の被害者が増えた。大自然からの採掘物は、神の神秘によって守られている（《歙州硯譜》）。このように、人の目に龍尾石はあたかも神の賜り物“神品”であるかのように映った。このような龍尾石の採掘の困難に対し、庶民は畏怖の念を覚え、自ら好んで採掘したがる者はいなかった。そのため、歴史上幾度にわたる採掘は、すべて政府の組織により踏み切られた。その後も政府によって容赦なく進められる採掘に庶民は否応なく参加させられたが、採掘された石は、質も量も以前を上回ることはなかった。戦争の歳月に苛まれ災難の被害を受けると、政府は採掘を中断するが、月日が経ち硯坑は荒廃して、また政府は採掘を始めるが、歙硯を採し出すことも安易でなかった。そのため、元明清のいくつかの時代の歙硯の採掘、制硯業は南唐北宋時代の繁栄を超えることはなかった。

歙硯は我が国の四大名硯のひとつである。比較的高い実用価値、芸術的価値、収蔵価値を供え持つ。しかし、結局のところ人々の生活の中で使われる消耗品でないわけでもなく、南唐北宋時代に作られた歙硯も多く現代に残っていて、一部の人々の需要を満たしている。何度も述べるように、龍尾石の採掘は難しく、このことが龍尾硯に対する人々の欲求を少なくしている。このことが歴史的な龍尾硯の繁栄から衰退に至る主な原因といえる。

#### (四) 復興

P71

解放後、党と政府からの重視により、1963年から歙県、婺源県関係当局は専門家を龍尾山へ派遣し、古い硯坑での調査を行った。続いて、婺源県の特に龍尾山に專業硯石採掘隊（後に硯石砧と呼ばれるようになった）を創立し、龍尾石の採掘に対し組織的、計画的お開発を進めた。歴史的な名坑も相次いで発掘され、毎年採掘された硯石を婺源、歙県の両方の制硯工場に供給した。また硯界には様々な種類が出始め、人々の注目を集めた。歙硯の採掘、制硯業は歴史上かつてない繁栄の時期へと突入した。

1980年代初頭、歙硯の生産、制作には二つの工場が携わっていた。一つは歙県の歙硯場（旧名歙県工芸場）と、婺源県の龍尾硯場（旧名婺源県硯台場、婺源県工芸美術場）である。両工場は製品の名称が重なる事を避けるために、歙県の工場の製品には歙硯、婺源県の工場の製品には龍尾硯と名付けた。つまり、龍尾硯と歙硯は事実上同じ物であり、龍尾石は両工場で使用される共同の材料である。このように本質的に同じ物の制作や販売の場所を変えることはできない。しかし時が経つにつれ習慣化し、現在でも多くの人々が二ヶ所の産地で売られている硯を、知ってか知らずか区別して歙硯、龍尾硯と呼んでいる。

経済計画時期に、二つの工場は歙硯の生産復興、歙硯の伝統文化の継承、拡大のために大規模な献上品を作り出した。時代性、芸術性を持つ硯を後世に向け制作し、今までの硯の彫刻の殻を破った。1979年冬、婺源県の龍尾硯場が北京中国歴史博物館にて“中国龍尾硯展覧”を開催し、成功を収めた。展覧会は当時の硯界に衝撃を与え、北京の書画界、文化界の人々に深く印象を残した。1984年元旦、婺源龍尾硯場は上海でも“中国龍尾硯展覧”

を開催した。同時期に歙県工芸場も相次いで北京、上海にて歙硯の展覧会を開催した。展覧会を無事成功させたことにより、当時の人々の歙硯に対する理解はさらに深まり、またそれによって歙硯の発展はさらに促進された。歙硯は現在に至るまで日本、韓国、シンガポール等の国々に市場を置き、これらは以降の歙硯の発展の礎となった。

1984年、婺源県大畈郷にて“大畈魚子硯場”が創設され、同じ年に歙県には“歙硯研究所”（後に歙硯場と合併）がつくられた。1989年、婺源では歙硯の彫刻をメインとした“婺源県工芸彫刻場”も創設され、続いて歙県、黄山市、黟県などに、規模の違う制硯場がつくられた。

1990年代初期、市場経済の発展に伴い、上記の制硯工場は相次いで解体された。歙硯のような伝統工芸品の制作は民間に回帰され、個人が私営する小さな工場や店舗が次々と現れた。婺源、歙県、黄山などでは名人も多く生まれ、歙硯製造業の発展を形成、発展の追い風となった。歙硯の制作から見ると、婺源、歙県の両地では婺源の大畈村と硯山村の村民が地元の資源である硯石を優勢的に利用し、最も早いうちから粗末な硯石の加工、彫刻を始め、家庭式の硯工場を作り上げた。特に、硯山村の多くの家庭で硯石の加工、制硯、販売関係の仕事に就いた。ある者は県の都に硯石、硯台の専門店を開き、ある者は省の都に、あるものは京の都にまで進出した。市場では歙硯は元の売り主から別の店主へ、そしてまた別の店主へと転売された。婺源県の都、歙県の都、黄山老街にはどこも歙硯の専門店がたくさんあるので、国内市場を見てみるとよい。1990年、婺源県では民営の硯研究機構—婺源県龍尾硯研究所が創立された。婺源は歙硯の産地ということから、近年では観光業が発達し、硯の製造販売が主な観光資源となり、婺源県の都も年々賑わいを見せている。今日に至るまで、歙硯の製造業に携わった人は多く、生産量も増え続けている。彫刻のレベルは上がり、それらはすべて歴史上のどの時期にも比べものにならないほどで、喜ばしい繁栄の局面を呈している。同時に多くの良質な書や絵画も湧きあがり、硯の彫刻工芸に名を残す歙硯彫刻芸術家も現れた。彼らの作品は伝統的な風格を継承した基礎の上に斬新さが付け加えられ、独自の芸術的風格を形成している。このような歙硯の彫刻芸術のレベルアップと彫刻芸術の発展は、積極的な促進を作用したといえる。

## 五 歙硯の手入れの豆知識

### P72

硯は昔から一貫して“文房四宝”の中で最も人々に愛されてきた。人々の生活の中で硯が発揮する効力と、人々が硯をいかに珍重しているかが見て取れる。我々の祖先は硯の実用、鑑賞、收藏などについて研究を重ね、多くの経験を積み重ねてきた。それらは今日の我々、硯の愛好家にとって価値ある学習資料となっている。歙硯の手入れ方法は、他の種類の硯にも応用できる点が多いので、参考にさせていただきたい。下記に主なポイントを挙げる。

歙硯は彫刻の完成後、表面に油を塗っている。一般的にはクルミ油、ひまし油などの比較的濃度の薄い植物油を用いるが、現在でもミシン用の油を使用している例もある。そのため、新しい硯をおろす前に耐水サンドペーパーと水を用い（500号）、硯堂を軽く磨き、その後水で洗い流すとよい。硯堂を磨く目的は、硯の表面の油を落とすことであり、昔の人はこれを“開硯”と呼んだ。さらに、使い込んで墨を磨る効果が鈍ってきたと感じた時にも、“開硯”を施せば以前の効果を取り戻すことができる。

硯で墨を磨る際には、清潔な水を使用し、お茶やお湯などの使用は避ける。色のついた水は墨の色を濁らせ、熱水は硯にとって良くない。墨にもこだわり、あまり粗悪な墨は墨の中に硬い物質が混ざっている場合があり、硯の表面を傷つける恐れがあるため、使用は避けるべきである。墨を磨り終えたら、墨を硯の上に放置せず、墨床もしくは墨箱に置く。硯の上に放置すると、墨の成分に混ざっているにかわが硯にこびりつき、乾くと硯ではなく墨に傷をつけてしまう。新しい墨で墨を磨る場合は、墨の角で硯に傷をつけないよう、力を入れすぎないように注意する。

硯の使用後は、硯を清潔に保つため、次回墨を磨る際の墨の純度のために、水でよく洗う。墨汁を次回までそのままにしておくなど、もってのほかである。硯を洗う水も、熱水は良くない。また硯を洗う際には周囲の硬い物にぶつけることのないように注意する。硯を洗った後、墨池の中に少量の水を入れておくとなお良い。

次に、鑑賞については、硯を使用する過程でも感じるのだが、硯は実際に使ってこそ石質の美しさが最大限に引き出される。もちろん、硯を手にとって鑑賞すれば、その形式美や材質美をよく見ることもできる。その際には、硯を手で擦らないよう加護が必要である。しかし手の汗を利用すれば、硯を湿らせることもできる。身につけた玉が時間の経過につれ色味が変化し、“火”気がなくなるように、硯も手にとる時間が長くなると、このような影響が出る。もし、忙しく硯にたまにしか触れない場合は、不定期であっても硯に油を塗り、硯の乾燥を防ぐ必要がある。油は塗りすぎないように、塗った後に柔らかい布で擦ると潤いが保たれ、手にとっても油でべたつくことはない。

硯を収蔵する際には、専用の木箱に入れておくのが安心である。昔の人はこれを“入盆為安”と言った。無論、実用の硯も収蔵の硯と同じく木箱に納めておく必要がある。木箱は底と蓋の二つに分けられ、一般的に硯の形に合わせて作られる。硯箱を作る際には、ぴったりしすぎず適度に余裕を持たせる必要がある。なぜなら、木材は時間が経つと収縮するが、硯は収縮することがないためである。そのため、硯箱の制作は一般的に硯の四隅に二ミリほどの空間を残す。歙硯の硯箱作りは独特で、良質な雑木を使用している。硯箱の制作後、黒か海老茶色のニス塗りを施す。ニスを塗り、耐水サンドペーパーで表面を削り、またニスを塗るという工程を重ね、最後につや出しの蝋を塗れば漆のように光る。

硯を家の中で保存する際の注意点：一、直射日光を避けて保存する。二、零度以下など、低温すぎる場所に置かないこと。硯が凍り、悪影響である。三、尖った物や硬い物と一緒に置かないこと。動かす際に傷をつけるおそれがある。